

価値論および分配論における

アダム・スミスとリカードウ(上)

岡崎 栄 松

一 問題の提起

二 価値論および分配論におけるA・スミスの二重性

(一) 投下労働説と支配労働説との交錯

(二) 分解価値説と構成価値説との交錯

(三) A・スミスと「三位一体的範式」(以上、本号所載)

三 価値論および分配論におけるリカードウの一貫性(以下、次号所載)

(一) 価値論の確立と支配労働説の排除

(二) 分配論の展開と構成価値説の排除

(三) リカードウと「三位一体的範式」

四 問題の総括

価値論および分配論におけるアダム・スミスとリカードウ(上) (岡崎)

一 問題の提起

古典経済学 (Die klassische politische Ökonomie)——イギリスではウイリアム・ペティ、A・スミスおよびリカードによって代表され、フランスではボアギュベール、ケネーおよびシモンディによって代表されるどころの古典経済学の任務は、ブルジョアの生産様式を科学的に分析し、近代ブルジョア社会の内部構造を究明することにあつたが、事実、彼ら古典経済学者たちは、みずから与えられたこの任務をば多かれ少かれ遂行した。といふのは、古典経済学者たちは、その価値論および剰余価値論を展開することによって、まず利子を利潤の一部分に還元し、さらに利潤および地代をいずれも剰余価値の一部分として把握し、そして最後に、価値および剰余価値を生産過程において労働および剰余労働に還元し、まさにそうすることによって、彼らは事実上つぎのことを、すなわち利潤・地代・賃金という諸所得は、なんらの形態規定をもたない生産諸要因たる生産手段・土地・労働そのものが生産過程一般で演ずる役割から発生するのではなくて、これらの諸所得は、一定の歴史的に規定された生産諸要因——資本、近代的土地所有および賃労働——を必然的に内蔵するものだということを示したからである。いいかえれば、彼らは、分配のブルジョアの形態は生産自体のブルジョアの形態を前提するものであり、一定の分配諸関係は不可避的に一定の生産諸関係によって規定されているということを示したからである。ここにわれわれは、古典経済学者たちがその価値論および剰余価値論を展開したことの絶大な科学的意義を見出すことができるであらう。

また実際、古典経済学者たちがこのように、みずからの価値論および剰余価値論にもとづいてその学問的任務

を多かれ少かれ遂行したがゆえにこそ、マルクスは、彼らの経済学を「俗流経済学」(Die Vulgärökonomie)から厳密に區別して、つきのごとく云つたのであつた。——「きつぱり断つておくが、わたしが古典経済学^(註)というのは、ブルジョアの生産諸関係の内的連絡を探究するW・ペテ、^(註)以来の全経済学のことであり、これにたいして俗流経済学^(註)というのは、外見上の連絡の範圍だけをうるつき廻つて、いわばもつとも粗荒な諸現象の尤もらしい説明とブルジョアの自家用とのために、科学的経済学によつて久しい以前に提供された材料をたえず新たに反芻し、しかもとにかく自己の最善の世界にかんするブルジョア的生産当事者たちの平凡で独りよがりな諸表象を体系化し、衝学的にし、かつ永遠の真理だと宣言することに躑躅するところの経済学のことである。」⁽¹⁾〔力点は原文のゲシュペルト。以下においては、力点——マルクス、というふう^(註)に記す。なお、原文がイタリックの場合もこれと同様。〕かようにマルクスは、古典経済学の科学的功績をば、それが、いたずらに現象の世界に目を奪われることなく、事實上、一定の歴史的に規定された生産をとりあつかひ、この生産において人と人とがとりむすぶ社会的諸関係を分析した点に認めつつ、かかるものとしての古典経済学を「俗流経済学」から峻別したのである。

〔註〕ここに明示されているように、マルクスはW・ペテイ、ケネー、スミスらが「ブルジョア的生産諸関係の内的連絡」を探究したかぎりにおいてのみ、彼らの経済学にたいして、古典経済学^(註)というこの名譽ある称号をあたえたのであつた。ところが、高橋誠一郎氏は、このことをまったく顧慮されずに、「経済学上に於ける古典学派なる名称は、恐らく、経済学の創設に与つて力のあつた堂々たる大家たちが悉く此の学派に属していることを示す^(註)が爲めに使用せられる所であらう」と考えられている。そして氏は、「正統学派に属する主なる著者は英國人であるが、而も此の学派は決して英國人にのみ限らるべきものではない。吾人は須らく、ジャン・バチスト・セイの名を之に加うべきであらう」と主張され、さらにすすんで、「此の学

派」にJ・ミル、マカロック、マルサス、シーニョア、ケアンズ、等々の「堂々たる大家たち」を包括せしめられるにいたっている。かかる見解が、古典経済学にかんする無概念的な把握にもとづくものであることは、ほとんど云うをまたないところであろう。

しかし、このように古典経済学なる概念を科学的に規定しようともされない高橋氏としてはむしろ当然のことながら、氏は、なおその歩をすすめて次のようにも述べられている。いわく、「ジョン・スチュアート・ミルの大著『経済原論』(Principles of Political Economy)と共に正統派経済学は其絶頂に登りつめ、之れと共に其の下り坂に立ったとも称せられるの概がある⁽⁴⁾。」と。(なお、この点にかんしては大内兵衛氏も同じ見解であるように思われる⁽⁵⁾)。だが、マルクスもいうように、古典経済学は、「イギリスではウイリアム・ペティに、フランスではボアギューベールにはじまり、イギリスではリカードウにフランスではシスモンデイに終る⁽⁶⁾」。「力点——引用者」のであって、事態はまさにこのようでありえなかったと云うべきである。なぜならば、総じて経済学がブルジョア的であるかぎり、それは、階級闘争が未発展な段階においてのみ、科学たりうるにすぎないからである。

しかしながら、古典経済学者たちは、いずれもブルジョアの視野に局限せられていたために、資本制生産様式を生産の永久的な自然形態だと見做し、かくしてこの生産様式を絶対化してしまった。^(註)したがって、彼らにとつては、生産諸要因の歴史的・社会的形態規定性を明確に認識し、自己の研究対象を意識的に、一定の歴史的に規定された生産において見出すことは、もちろん不可能であった。それゆえにまた、古典経済学者たちがその任務、すなわち近代ブルジョア社会の内部構造の解明という任務を遂行したとしても、それは、あくまでもブルジョアの限界の範囲内において可能なかぎりでのことでしかなかった。

〔註〕 もっとも、フランス古典経済学の最後の代表者たるシスモンデイは、この点で例外をなしているかのようである。け

だし彼は、資本制生産様式を生産のもつとも自然的な、あるいはもつとも優れた形態と解することなく、むしろこの生産様式の暫時的・過渡的性格を予感して、資本主義の諸矛盾をひどく攻撃したからである。けれども彼シモンデイは、小ブルジョア的な観点に立っていたために、みずからの対象を明確に、一定の歴史的に規定された生産様式においてとらえることができなかつたし、したがってまた、ブルジョア的生産諸関係の内的連繫の分析を徹底的に押しすすめることもできなかつた。シモンデイが、とりわけリカアドウを念頭に置きながら、経済学者たちはあまりにも生産を一面的に重視しすぎると批難したことを想起せよ。この場合には、彼は、分配の編制がまったく生産の編制に依存するものであることを正當に理解してはいないばかりでなく、あたかも分配が、生産とならんで自立的な領域を占めるかのように表象してさえいるのである。

なるほど古典経済学者たちは、上述したように、常識的・俗流的な見解を、すなわち近代的諸所得とはあらゆる社会形態に共通な質料的生産諸要因——生産手段・土地・労働——を媒介として、いわば自然的に諸階級に帰属するものにほかならないという見解をともにすることなく、みずからの価値論および剰余価値論にもとづいて価値を労働に、また利潤および地代を事実上、剰余価値に還元した。しかし、彼ら古典経済学者たちは、その狭隘なブルジョアの視野に制約せられていたために、「剰余価値」を固有の範疇として定立することができなかつた。F・エンゲルスは、『資本論』（英語版）への序文において、この点を指摘しながら次のように述べている。

「経済学は概して商業的および産業的生活の諸用語をそのまま受けとり、かつそれらを運用することで満足してきたのであって、そうすることにより、経済学は、それらの諸用語によつて表現せられた諸理念のせまい範囲内に局限せられたといふことにはまかつたく気づかぬのできたのである。かくて古典経済学でさえも、利潤や地代は、労働者とその傭主に提供しなければならぬ生産物の不払部分（かの傭主は、この部分の最後の排他的所有者ではないが最初の取得者である）の細分もしくは断片にすぎないということを十分に気づいていたとはいへ、しかもけつして利潤および地代にかんする普通の概念を

踏みこえたことがなく、生産物のこの不払部分（マルクスによって剰余生産物と名づけられた部分）を、一全体としてのその総体性において研究したことがなく、したがってまた、その起源および本質にかんしても、その価値のその後の分配を規制する諸法則にかんしても、明白な理解に到達したことがない。⁽⁷⁾」

かくして古典経済学者たちは、利潤および地代がともに剰余価値の転化せる形態であることを、明瞭な意識を以って把握することができなかった。実際、エンゲルスのいうように、彼らはいずれもみな、「利潤および地代にかんする普通概念」とらわれていて、「剰余価値」範疇を確立しようと試みさえしなかったのである。ここに彼らの剰余価値論が、剰余価値論そのものとしてではなく、分配論という形態で展開された所以がある。

古典経済学者たちは、かように「商業的および産業的生活の諸用語」を無批判的に採用することによって、ブルジョア社会にかんする自己の解剖学を多かれ少かれ不明瞭にしているのである。否、そればかりではない。彼らは、ブルジョアの生産諸関係の科学的分析を中途半端で打ち切つて、ともすれば、みずからの学問上の任務を忘却してしまふのであり、程度の差こそあれ、彼ら自身、仮象の世界に目を奪われて、あらゆる社会形態に共通な生産一般における物と人との、または物と物との関係を問題にするのである。こうしたことが古典経済学一般の限界をなしていることは、あらためていうまでもない。

さて、われわれにとつての課題は、イギリス古典経済学の二人の代表者、すなわち本来のマニユファクチュア期の古典経済学者たるA・スミスと、産業革命期の古典経済学者たるリカードウとの価値論および分配論を検討することである。換言すれば、スミスとリカードウとが、それぞれの価値論および分配論にもとづいてどの程度まで近代市民社会の内部構造を究明していたか、だが同時に彼らは、そのブルジョアの立場に制約せられて、ど

のように前後撞着し、どのように未解決の矛盾に陥らざるをえなかつたか、という点を考察することである。

ところがスミスは、一方では、ブルジョアの生産諸関係を科学的に分析し、近代市民社会をその内的編制において把握しようと試みると同時に、他方では、事態をば、それがブルジョア的生産代理者たちにたいしてみずから表示するがままに敘述しようと試みる。つまりスミスは、科学的な把握様式 (Die esoterische Auffassungsweise) と皮相的な把握様式 (Die exoterische Auffassungsweise) との双方をもっているのである。そして彼は、まえの把握様式のもとでは商品の価値を投下労働量によつて規定し、利潤、地代および賃金をいずれも商品価値の分解部分として把握する。すなわち、科学的な観点に立つスミスは、投下労働説と分解価値説とを展開するのである。しかるに彼は、同時に、あとの把握様式のもとに支配労働説と構成価値説とを論述する。いいかれば、皮相的な観点に立つスミスは、商品の価値をその商品が支配しうる労働の分量によつて規定し、さらに利潤、地代および賃金を以つて交換価値の構成者だとするわけである。そしてこの場合には、スミスは、質料的生産諸要素たる生産手段・土地・労働が生産過程一般で果す機能から利潤・地代・賃金なる諸所得が発生し、かつこれらの諸所得が商品の交換価値を構成する、というふう^{〔註〕}に考えているのである。だがこのことは、スミスが「資本——利潤、土地——地代、労働——賃金」なる範式^{〔註〕}を、すなわちマルクスによつて「三位一体的範式」(Die trinitarische Formel) あるいは「経済学的三位一体」(Die ökonomische Trinität) と命名されたところの範式を定式化したことを意味するものにほかならない。一言にして云えば、スミスがその支配労働説および構成価値説を論述する場合には、彼は、まったく仮象の世界にとらわれて、近代ブルジョア社会の内的編成の解明という古典経済学の本来的任務をすっかり忘れはてているのである。

〔註〕 マルクスが皮肉りながら指摘したように、この範式で挙げられている生産諸要因は、「まったく相異なる諸面に所属するのであって、相互にいささかの類似点もない。それらの相互関係は、あたかも公証人手数料と人參と音楽との相互関係のようなものである。」⁽⁸⁾なぜというに、この範式では、一定の歴史的に規定された社会的形態たる資本とならんで、文字どおり無造作に、一方では自然そのものとしての土地が、他方では、なんらの歴史的・社会的規定性をもたない労働一般が、生産諸要因として配列されているからである。別言すれば、社会的生産過程の一定の歴史的形態に属する資本のすぐそばに、あらゆる社会形態に共通な質料的生産要素としての土地および労働が平気で並べられているからである。

だが実は、この範式において生産諸要因の一つとして示されている「資本」なるものは、けっして一定の歴史的に規定された社会的形態として把握されたものではない。というのは、資本は必然的に賃労働としての労働を前提するものであり、したがって、もしひとが、労働の歴史的に規定された社会的形態たる賃労働を労働一般と同一視する場合には、彼はまさにそのことによって、同時に資本からもそのいっさいの形態規定を奪いとっているからである。それゆえ、この範式において生産諸要因の一つとして示されている「資本」なるものは、実は、あらゆる現実的生産過程に共通的に必要な対象的生産要素たる生産手段、それ自体を表現するための他の名称にはかならない。だからまた、われわれはつぎのようことができる。——「三位一体的範式」において配列されている生産諸要因は、いずれも例外なく、たんに自然的形態として把握されたものにすぎず、けっして同一の経済的社会構造に属する歴史的形態としてとらえられたものではない、と。

しかもアダム・スミスは、ただたんに科学的な把握様式と皮相的な把握様式とをとも有しているばかりではない。そうではなく、スミスは、この二つの把握様式を交錯させて平然としてしているのであって、これがむしろ彼の基本的な特徴をなしている。そこでスミスの場合には、価値論において投下労働説と支配労働説との交錯が、また分配論において分解価値説と構成価値説との交錯が見られることになる。つまりスミスにあっては、価値論および分配論における二重性が特徴的なのである。^(註)

〔註〕『アダム・スミス革命』の著者、藤塚知義氏は、価値および剰余価値の規定におけるスミスの二重性そのものが理論的に甚だ重要な意義をもっているということを、とくに力説されている。すなわち氏は、スミスにおいて見られる投下労働説と支配労働説との交錯ならびに分解価値説と構成価値説との交錯は、価値論および分配論におけるスミスの功績をなすものであり、まさにこの交錯が、彼をしてリカアドウよりも優越せしめる所以だと主張されているのである。⁽⁹⁾

ところでわれわれは、価値論および分配論の領域においてスミスがしばしばリカアドウよりも優位しているとの主張にかなするかぎりは、これに何らの異論もない。しかし、われわれには、リカアドウにたいするスミスのこの優位は価値および剰余価値の規定におけるスミスの二重的性格に由来するのではなく、それは、彼が比較的強い歴史意識をもっていたことにもとづくものだと思われる。

価値論および分配論におけるスミスの二重性そのものについていえば、それは、藤塚氏のいわれるごとく、スミスの功績をなしているところではなく、むしろ反対に、彼の価値論および分配論の非常な限界をなすものであろう。というのは、スミスがその価値論において投下労働説と支配労働説とを交錯させ、かつ、その分配論において分解価値説と構成価値説とを並存させるにいたった理論的根拠は、後述するように、彼の投下労働説および分解価値説そのものの根本的欠陥たる価値形態の無視ならびに労働と労働力との混同に存するからであり、また、スミスが支配労働説と構成価値説とを展開する場合に、彼は、一定の歴史的に規定された生産をではなく、あらゆる社会形態に共通な生産一般をとりあつかっているのだからである。

しかるに、リカアドウにおいては事情がまったく異なっている。というのはリカアドウは、スミスのように二つの試みにたいして、すなわち近代市民社会の隠れたる構造を追求し、ブルジョア的体系の内奥に突入せんとする試みと、現象諸形態そのものを記述・分類し、これらの現象諸形態相互の外面的な関連を敘述せんとする試みとの双方にたいして同じ程度の関心を抱くことなく、もっぱら科学としての経済学の樹立に精力を傾けたからで

ある。したがって、リカアドウにあつては、価値論における投下労働説と支配労働説との交錯も、また分配論における分解価値説と構成価値説との交錯も見られない。否むしろ、彼は、スミスからその科学的把握様式を受けつぐと同時に、皮相的な観点に立つスミスは、力をこめて批判するのである。詳言すれば、リカアドウは、スミスの投下労働説を継承することによって自分自身の価値論を確立し、この価値論にもとづいて自己の分配論Ⅱ分解価値説を展開するだけでなく、さらにすすんで、スミスの支配労働説と構成価値説とを極力排除せんとするのである。つまりリカアドウは、「三位一体的範式」の定式者としての A・スミスを批判することに非常な関心をもっているわけである。だからリカアドウの場合には、価値論および分配論における一貫性が目立っている。

しかしながら、リカアドウもまた、古典経済学一般に附与された限界を踏みこえることができなかった。すなわち、彼もまた、生産諸要因を明確に資本・近代的土地所有・賃労働として把握することができなかった。というよりも、リカアドウは、資本主義の飛躍的發展期におけるブルジョア・イデオログたるにふさわしく、他の古典経済学者たちよりもいっそう甚だしく資本制生産様式を絶対化したのである。この点については、周知のように、マルクスの古典的な敘述がある。念のため、われわれはそれを左に引用しておこう。

「彼〔リカアドウ——引用者〕は、原始漁撈者と原始狩獵者をしていきなり商品所有者として、魚と獸とをそれらの交換価値で対象化されている労働時間に比例して交換させている。そのさい彼は、原始漁撈者と原始狩獵者とが彼らの労働具の計算のため、一八一七年にロンドン取引所で通用するイギリス国債年利計算表を参考にするという時代錯誤に陥っている。『オーウエン氏の平行四辺形』は、ブルジョアの社会形態以外に彼の知っていた唯一の社会形態のようである。」⁽¹⁰⁾

リカアドウは、かように、ひどい「時代錯誤」に陥るほどまでにブルジョアの生産様式を絶対化していたのであるが、そうだとすれば、スミスの支配労働説および構成価値説を排除せんとする彼の試みが不徹底のままに終るであらうこともまた、明らかである。否、そればかりではない。価値論および分配論の領域でリカアドウは、理論的に非常に重要な諸点においてスミスから後退してさえいるのである。^(註)だから、リカアドウが「三位一体的範式」の定式者としてのA・スミスに批判を加えたとしても、この批判は、あくまでもブルジョアの限界内において可能なかぎりでのものではしかなかった。

〔註〕 すでに見たように、藤塚知義氏は、価値論および分配論におけるスミスの二重性そのものが理論的に重要な意義をもっていると考えられるのであるが、かかる見地に立たれる氏としてはむしろ当然のことながら、氏は、リカアドウが価値論においてスミスに劣っているのは、彼がスミスの支配労働説を一面的に否定したからであり、また、リカアドウが分配論においてスミスから後退するにいたったのは、彼がスミスの構成価値説を一面的に排除したからだとされている。⁽¹⁾

スミスの支配労働説と構成価値説とにたいするリカアドウの批判が一面的であったこと——これは事実である。しかし、リカアドウが価値論および分配論の領域でスミスよりも後退するにいたったのは、藤塚氏が考えられているように、彼リカアドウが、スミスの支配労働説と構成価値説とを一面的に否定あるいは排除したことによるわけでは決していない。リカアドウは、ブルジョア的生産様式を極度に絶対化したがいえにこそ、価値論および分配論の領域で、理論的に甚だ重要な諸点においてスミスから後退せざるをえなかったのであり、また、リカアドウの価値論および分配論のかかる諸欠陥が、スミスの支配労働説および構成価値説にたいする彼の批判を一面的にしたのである。

とはいえ、このことは、リカアドウがスミスの支配労働説と構成価値説とを排除したことの科学的功績を抹殺するものではない。リカアドウが、価値論および分配論におけるスミスの二重性を攻撃しつつ、彼自身はこれらの理論領域で可能なか

ぎり首尾一貫的たらんとしたことは、科学的経済学の發展のうえから見て非常に重要な意義をもっているのである。藤塚氏はこうした事情を見逃されて、リカアドウの価値論および分配論を過少評価されているように思われる。この点は、行論のうち次第に明らかになってくるであろう。

しかし、リカアドウの価値論および分配論そのものが内包していた諸欠陥は、たんに「三位一体的範式」にたいする彼の批判を不徹底なものたらしめるだけに終りはなかった。すなわち、この諸欠陥は、ほかならぬ彼自身の経済学体系を崩壊にみちびき、やがては古典経済学そのものを解体にみちびくことになるのである。

かくてわれわれは、さきに提起した問題を考察するにあたって、まず最初に、アダム・スミスがどのように、その価値論において投下労働説と支配労働説とを交錯させているかを検討しなければならない。つまり、価値論の領域におけるスミスの二重的性格を検討しなければならない。これが、次章第一節の課題をなす。そして、この課題を立ち入って考察することにより、スミス投下労働説の意義と限界が明確になるとともに、スミス支配労働説の意味内容もまた明らかになるであろう。つぎにわれわれは、分配論の領域におけるスミスの二重性を次章第二節で跡づけることにする。ここでは、スミス分解価値説の意義と限界が明らかになると同時に、スミス構成価値説のもつ意味が解明されるであろう。だがわれわれは、さらにすすんで、スミスが価値論において投下労働説と支配労働説とを、また分配論において分解価値説と構成価値説とを交錯的に展開したことが、いったい如何なる意味をもっているかを検討しなければならない。これが、次章第三節の課題である。そして、ここでわれわれは、スミス投下労働説の欠陥がどのようにスミス分解価値説を限界づけているか、またこのスミス分解価値説の限界が如何に彼の国民所得論を制約しているか、といった諸点を明らかにしようと考えている。

ところで、かようにして価値論および分配論におけるスミスの二重性を検討したのちに、われわれは第三章で、おなじ理論領域におけるリカアドウの一貫性を問題にする。まず同章第一節では、リカアドウが、スミス投下労働説を継承することによって彼自身の価値論を確立し、さらに、この価値論にもとづいてスミス支配労働説を排除する事情が検討される。そのさい、リカアドウの価値論の欠陥が、いかにスミスにたいする彼の批判を一面的にしているかという点が明らかにされるであろう。つぎにわれわれは、第三章第二節において、リカアドウ分配論の一貫性を跡づけると同時に、リカアドウがスミスの皮相的な分配論をどのように批判するかを問題にする。

だが、さらにわれわれは、価値論および分配論におけるリカアドウの首尾一貫性が如何なる意義をもっているかを考察しなければならぬ。これが、第三章第三節における課題である。つまり、この節では、リカアドウにおける価値論と分配論との連繋が問題にされるわけである。そのさい、リカアドウの「分配宣言」、すなわち経済学の本来の対象は生産ではなく、まさに分配であるという宣言のもつ意味が明瞭になるであろう。そして同時に、リカアドウ価値論そのものに内在する根本的欠陥が彼の分配論および国民所得論を大きく限界づけている事情もまた明らかにするであろう。

ところで、すでに一言したようにスミスは、比較的鋭い歴史感覚をもっていたために、歴史的観点をまったく欠除するリカアドウに対比して、価値論および分配論においてしばしば優越的な地位を占めている。そこでわれわれは、スミスがどの点でリカアドウよりも優っているかを、以上の諸節をつうじて明らかにすべきである。別言すれば、スミスの投下労働説および分解価値説をリカアドウの価値論および分配論と比較すべきである。

しかしながら、われわれは、本稿における考察の重点を、スミスとリカアドウとが価値論および分配論の領域

において如何にその研究態度を異にしているか、そして価値論および分配論におけるスミスの二重性と、おなじ理論領域におけるリカアドウの一貫性とはそれぞれどのような意味をもっているか、という問題の検討に置きたいと考えている。なぜなら、そうすることによってわれわれは、古典経済学のなかでスミスとリカアドウとが占める地位の相違をば、多少とも明らかにしようであるからである。

- (1) K. Marx, *Das Kapital*, herausg. v. F. Engels, 1922, I. Bd., SS. 47-48, Anm. 32. 長谷部文雄訳、日本評論社版、第一分冊、二七二ページ。
- (2) 高橋誠一郎・『正統学派経済学概論』(『正統学派経済学説研究』所収)、三ページ。
- (3) 高橋誠一郎・上掲書、四ページ。
- (4) 高橋誠一郎・上掲書、四一五ページ。
- (5) 大内兵衛・『国富論』(解題)、第五分冊、一四三ページ参照。
- (6) K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, *Volksausg.* bsgt. v. M.-E.-L.-Institut, S. 39. 宇高基輔訳、六八ページ。
- (7) K. Marx, *Das Kapital*, *Volksausg.* bsgt. v. M.-E.-L.-Institut, I. Bd., S. 26. 長谷部訳、第一分冊、一四九—一五〇ページ。
- (8) K. Marx, *Das Kapital*, herausg. v. F. Engels, III. Bd. II. Teil, S. 349. 長谷部訳、第十一分冊、三九四ページ。
- (9) 藤塚知義・『アダム・スミス革命』、三〇—三三ページ参照。
- (10) K. Marx, *Zur Kritik*, S. 48. 宇高訳、八三ページ。
- (11) 藤塚知義・『アダム・スミス革命』、二〇五—二〇六ページ参照。

二 価値論および分配論におけるA・スミスの二重性

〔一〕 投下労働説と支配労働説との交錯

われわれは、スミス価値論における投下労働説と支配労働説との交錯を問題にするにあたって、まず、スミスによつて展開された投下労働説そのものの内容と意義を検討することからはじめよう。

最初に、スミス自身のいうところを聞けばこうである。――

「資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社会においては、種々の対象物を獲得するために必要とせられる労働量のあいだの比率は、これらの対象物を相互に交換するための規則となりうる唯一の事情であつたと思われる。たとえば、狩獵民族のあいだで一頭の海狸を殺すには、二頭の鹿を殺すだけの労働が通常必要であるとすれば、一頭の海狸は当然、二頭の鹿と交換せられるであろう、あるいは、それは二頭の鹿の値いがあるものとされるであろう。その生産に通例二日または二時間の労働を要する物が、その生産に通例一日または一時間の労働を要する物の二倍の値いをもつことは当然である。」

いふまでもなく、ここではスミスは、「資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社会」を想定しているのであるが、しかし彼は、かかる社会において生産される生産物一般を、あるいは彼自身の言葉で云えば「対象物」(object)一般を、とりあつかつているわけではない。そうではなく、彼がとりあつかつているのは、実は、私的生産者たちによつて相互に交換されるところの「対象物」すなわち商品なのである。このことは、スミスが「対象物を相互に交換するための規則」を採し出そうとしていることを想えば、容易に理解しうるところであろう。

しかも彼は、かかる「規則」たりうるのは、「初期未開の社会」においては、ただ、「種々の対象物を獲得するために必要とせられる労働量のあいだの比率」だけだと主張して、このことを例を挙げて説明するのである。したがって、スミスが右の一章句で、商品の価値の大きさをその商品の生産に必要な労働時間によって規定し、かくしてみずからの投下労働説を展開していることは疑問の余地がない。またそれだからこそ、リカアドウは、自身自身の価値論―投下労働説の基本的命題を確証するものとして、右の一章句を他の諸章句とともに引用したのちに、「かくも正確に交換価値の本源を決定したアダム・スミス」とまで云ったのであった。

しかし、われわれは、スミスの投下労働説をより立ち入って考察するために、もつと彼自身に語らせよう。――『国富論』第一編第五章の冒頭で彼はいう。

「およそひとが富裕であるか貧乏であるかは、彼が生活必需品、便益品ならびに娯楽品を享受しうる程度に應ずるものである。しかし、ひとたび分業が完全におこなわれるようになると、彼自身の労働が彼に供給するところは、これらの品物の極めて小なる部分にすぎなくなる。彼は、その大部分を他人の労働から得なければならぬ。そこで彼は、彼が支配しうる労働の量、いかえれば、彼が購買しうる労働の量に應じて、あるいは富み、あるいは貧しからざるをえないのである。したがって、ある商品〔註〕 (commodity) の価値は、それを所有するけれどもそれをみずから使用もしくは消費しようとは思わず、それを他の諸商品と交換せんと欲するものにとつては、その商品が彼をして購買または支配せしめる労働の量に等しい。」

一見したところでは、スミスはここでは、商品の価値をその商品が支配しうる労働の量によつて規定し、かくして支配労働説を展開しているかのごとくである。事実、リカアドウはそのように考えて、スミスの右の所説に批判を加えている。（この点についてはのちに再びふれるであろう。なお、越村信三郎氏もリカアドウと同じ見

地に立つていられるように思われる。⁽³⁾しかし、けつして、そうではなく、スミスはここでもまた、商品の価値をば、その商品の生産に必要な労働量によって規定しているのであって、このことは、右の一文におけるスミスの所説、とくにその後半の部分を多少とも注意して読みさえすれば、まったく容易に理解されうるにちがいない。けれども、マルクスのいうごとく、スミスがここで重点を置こうとしているのは、分業によって惹きおこされた変化である。⁽⁴⁾すなわちスミスは、ひとたび分業が完全におこなわれるようになると、生産者の富がもはや彼自身の労働の生産物には依存しなくなり、それはいまや、彼が支配しうる他人の労働の量に正確に比例するようになるという点、そしてこの場合、生産者がどれだけ他人の労働を支配しうるかは、彼自身の生産物に投下されている労働の量に依存するという点を、強調しているのである。

〔註〕 大内兵衛氏は、氏の訳書『国富論』（岩波文庫版）において、スミスのいう commodity を「あるときには「物品」と、また他のときには「商品」と訳出されている。詳言すれば、大内氏は、第一編第四章から同編第六章にいたる諸章の commodity を「物品」と訳出され、そして第七章以下に見出される commodity は、これを「商品」と訳されているのである。そして氏は、かように訳すべき理由について、つぎのように註記されている。——「スミスにおいては commodity は商業の目的たる物品、即ち商品の意に用いられているが、本章〔すなわち第四章——引用者〕及び次章においては、その物品たる側に注目せられている故に、物品と訳し、それ以下の諸章においては、たいてい商品と訳す。⁽⁵⁾」

ここで大内氏は、氏がスミスの commodity を「物品」と訳出されたのは第四章と第五章との二つの章に限られるかのように述べられているが、実際には、氏は第六章における commodity をも「物品」と訳されている。そして第七章の冒頭では、氏自身、その訳者註において、前三章すなわち第四章から第六章までの commodity を「物品」と訳してきたことを明言されている。

ともあれ、右の一文を以つて明らかかなように、大内氏は、第四章―第六章ではスミスが「商業の目的たる物品」の「物品たる側」に注目しているから、これらの章の commodity は当然「物品」と訳出すべきであり、これに反して、第七章以下の諸章ではスミスが「商業の目的たる物品」の商品たる側に注目しているから、そこに見出される commodity は、これを「商品」と訳すのが適當だと考えられているのである。しかしスミスは、第七章から第十一章にいたる諸章の大部分の箇所では、事態をば、それがブルジョアの生産代理者たちになんとしてみずからを表示するがままに叙述しているのであつて、この場合、スミスが商品ではなく、まさに生産物一般すなわち「物品」を念頭に置いていることは後述するごとくである。これにたいして、第四章から第六章にいたる諸章では、スミスは相互に交換される生産物ととりあげて、その価値を投下労働量によつて規定するのであり、そしてこの場合には、彼は、一定の社会的生産関係を表示するものとしての商品、とりあつかつているといえる。けれども、スミス価値論においては投下労働説と支配労働説との交錯が特徴的であり、したがつてスミスは、これらの諸章でもまた、範疇としての商品だけでなく、生産物一般をも問題にする。それゆゑ、スミスのいう commodity の訳語として「物品」と「商品」とを厳密に区別せんと欲するなら、前者は、スミスが支配労働説の観点に立つている箇所にふさわしく、後者は、彼が投下労働量による価値規定を与えている箇所に適しているということになる。

しかしながら、われわれは、スミスの立つている観点が科学的であると皮相的であるとを問わず、彼の commodity をひとまず「商品」と訳出したうで、この概念のもとに彼が一定の社会的生産関係を表示するものとしての商品をとらえているか、それとも生産物そのものを念頭に置いているかという点は、これを前後の關係からそのときどきに判断すべきであると考えられる。けだし、こうする方がむしろ自然であり、また一般的でもあるからである。たとえば、capital なる概念のもとに実際には、なんらの歴史的・社会的規定性をもたない生産手段それ自体が理解されている場合にも、ひととは capital を「生産手段」とは訳さずに、これを通常、「資本」と訳出することを想起せよ。

ところでマルクスは、『経済学批判』において次のごとく述べている。——「農業、工業、航海業、商業、等々のごとき現実的労働の特殊の諸形態がつきつきに富の真の源泉だと主張されたのちに、アダム・スミスは、労働一般をば、——しかもその社会的総姿態における分業としての労働一般をば、質料的富あるいは使用価値の唯一の源泉だと宣言した。」「力点——マルクス」そして同じマルクスは、「彼〔スミス——引用者〕は、現実的労働が交換価値を措定する労働への、すなわち基本形態におけるブルジョアの労働への移行を分業によつてなしとげらうと試みた」〔力点——マルクス〕とも云つてゐる。かくてわれわれは、さきに引用せる一文においては、スミスは、商品の価値を支配労働量によつて規定してゐるところではなくて、社会的分業がひきおこす変化に着眼し、かつ分業の出現とともにたらされる私の労働と他人の労働との等置を強調することによつて、商品価値の実体を把握しようと試みてゐるのだ、ということを知るのである。

〔註〕 周知のように、この点にかんするスミス自身の言葉は『国富論』の劈頭に見出される。いわく、「すべての国民の年々の労働は、本来、その国民が年々消費するところのあらゆる生活必需品および便益品を供給する資源(fund)であつて、その必需品と便益品とは、この労働の直接の生産物であるか、あるいは、その生産物を以つて他国民から購買したものである。」⁽⁸⁾

スミスがこのように、質料的富の源泉を現実的労働の特殊の諸形態ではなく、社会的総姿態における労働一般に見出したことは、重商主義者およびスミス以前の古典経済学者たちからの巨大な前進を意味するものである。というのは、スミスはまさにそうすることによつて、これこれの特殊の生産部門における労働のみが価値を形成するという偏狭な見解から自己を解放することができたからである。しかし彼は、「あらゆる生活必需品および便益品」を供給するためには、生産の主体的要因たる労働だけでなく、その客体的要因たる生産手段もまた必要だという点をまったく見逃したのであつて、われわれがのちに問題にするところの、彼による「年々の生産物価値」と「年々の価値生産物」との混同は、すでにここにその契機

をあたえられているのである。

しかしながら、商品生産はたしかに社会的分業を前提するけれども、社会的分業は必ずしも商品生産を前提するものではない。いいかえれば、社会的分業なくしては商品生産はありえないが、しかし、社会的分業があたえられただけでは、まだ生産物が商品になるとは限らない。相互に自立的な生産者たちが、その個人的な生産物を交換する場合にのみ、彼らの生産物は商品に転化するのである。ところがスミスは、こうした事情を認識することもなく、ただ、社会的分業のもたらす変化に着眼し、かつこれを強調することによって、商品価値の実体をとらえようと企てているのである。したがって、スミスのこの企てが十分に成功しえないであろうことは、最初から明らかである。

もつとも、スミスが念頭に置いているのは、社会的分業のおこなわれる社会一般ではなくて、事実上、商品所有者たちの社会である。このことは、スミスが先の一章句で、「それ〔商品——引用者〕を所有するけれどもそれをみずから使用もしくは消費しようと思わず、それを他の諸商品と交換せんと欲するもの」について語っていることから明らかである。つまり、スミスが念頭に置いているのは、そこでは各人が交換によって生活するところの「商業社会」(commercial society)なのである。そしてスミスが事実上、商品所有者たちの社会を念頭に置いていたかぎり、彼スミスは、社会的分業のもたらす変化に注意を集中することによって、つぎの点、すなわち労働は、それが諸商品の価値に結果するかぎりでは人間的労働力一般の支出としてのみ意義をもつという点に感づくことができたのであった。^(註)

〔註〕 たとえば、スミスがつぎのように主張する場合にはそうである。——「彼〔つまり労働者——引用者〕は、彼の健康、

力および活動の正常な状態においては、また、彼が有しうべき熟練の平均度を以ってしては、彼はつねに彼の安息、彼の自由および彼の幸福の同じ部分を犠牲に供さなければならぬ。⁽⁹⁾」

しかしスミスは、社会的分業が必ずしも商品生産を前提しない点をはつきりと認識していたわけではなかつたし、だからまた彼は、明白な意識を以つて商品から出発することもできなかった。それゆえに、スミスが社会的分業の出現とともにたらされる私の労働と他人の労働との等置を強調するさいにも、彼は、私の労働それ自身が、あるいは私の商品に包含されている労働そのものが、すでに社会的に規定されていることを見逃している。

だがこのことは、とりもなおさずA・スミスが、価値の実体をなす労働の独自の性格を正しく把握しえなかつたことを意味するものにほかならない。かくてスミスによる価値の実体把握の試みは、当然のことながら不成功に終つていたのである。したがつて、スミスが商品価値を投下労働量によつて規定する場合にも、価値の実体そのものは彼においては不明瞭のままである。^(註)

〔註〕ところが藤塚知義氏は、あたかもスミスが価値の実体把握に成功したかのごとく主張されているのであつて、そのさい氏の論拠となつてゐるのは、『剰余価値学説史』(第一卷)におけるマルクスのつぎの一文である。

「強調されるのは、ここ「われわれが先に引用したところの、「およそひとが富裕であるか貧乏であるかは……」というスミスの一章句——引用者)では、分業によつてひきおこされた変化である。すなわち、富は、もはや彼自身の労働の生産物には存せずして、この生産物が支配する他人の労働の量に、すなわち彼が購買しうる社会的労働の量——その量は、みずから生産物自身に包含されている労働の量によつて決定される——に存する。……ここで重点が置かれてゐるのは、分業および交換価値とともにたらされる私の労働と他人の労働との、換言すれば社会的労働との等置であつて(私の労働、または私の商品に包含されている労働がすでに社会的に規定されてゐること、そしてその性質が本質的に変化したということ

は、アダムにあつては見落されている）、けつして対象化された労働と生きた労働とのあいだの区別ではなく、またその交換の特殊な法則でもない。実際においてアダム・スミスは、ここでは、商品の価値がその商品に包含されている労働時間によつて規定されるということ、そして商品所有者の富は、彼が処理しうる社会的労働の量に依存するということをいっているにすぎないのである。⁽¹⁰⁾「力点——マルクス」

藤塚氏は、右の一文について次のように述べられる。——「通説が単純に『支配労働』価値説を以つて誤れる規定となすのと反対に、マルクスは、むしろこの二つの規定の並列そのものの中に、価値を作る労働としての『一般的・社会的・労働』（『抽象的・人間的・労働』）が事実上把握されていることを見ているのである。」⁽¹¹⁾「力点——藤塚氏」

しかしながら、右の一文においてマルクスが指摘しているのは、(一) A・スミスは、かの章句ではけつして資本と賃労働との交換の問題をとりあげておいてではないということ、および、(二) スミスは、ここでは商品の価値を投下労働量によつて規定しているばかりでなく、分業がもたらす変化に重点を置くことによつて価値の実体把握を試みているということだけであり、スミスのこの試みが成功したことについては、マルクスはまったく一言もしていない。況んや、A・スミスが、その価値論において投下労働説と支配労働説とを「並列」させることによつて、価値の実体たる「一般的・社会的・労働」＝抽象的・人間的労働を把握したなどは、マルクスは右の一文においてのみならず、どこにおいても語っていない。否そればかりでなく、マルクスは、「私の労働、または私の商品に包含されている労働がすでに社会的に規定されていること、そしてその性質が本質的に変化したということは、アダムにあつては見落されている」点を、きつぱりと確言してさえているのである。もつとも藤塚氏は、スミスが商品価値の実体をなす労働——「一般的・社会的・労働」——を把握したのは「事実上」であるとしておられる。しかし、この留保は行論のうちにつきり除去されるのであつて、たとへば、氏がつぎのように主張される場合にはそうである。——「そこ」『国富論』——引用者——では既に富が、単に必需品および便益品としてではなく、一般的・社会的・労働（価値を作る労働）によつて年々再生産されるものとして把握される。富の規定は全社会的な再生産

の契機を含むことによつてはじめて論理的に「商品」として把握される。そこでは商品を作る労働は、『投下労働』たると同時に『支配労働』たるものとして、従つて価値を作る一般的・社会的・労働として、把握される。⁽¹²⁾〔力点——藤塚氏〕

藤塚氏がかように主張されるにいたつたのは、マルクスの右の一文に見られる「社会的労働」(gesellschaftliche Arbeit)という表現を、氏が誤解されたことにもとづいて思うように思われる。つまり藤塚氏は、マルクス自身においてはこの場合「他人の労働」の同義語として使用されているところの「社会的労働」をば、それがただちに「一般的・社会的・労働」＝抽象的・人間的労働を意味するものであるかのように速断され、その結果、マルクスの所論そのものを正しく理解されることもなく、あたかもA・スマイスが、私の労働と他人の労働との等置を強調することによつて商品価値の実体把握に成功したかのごとく主張されることとなつたわけである。そして氏は、さらにすんで「私の労働」を「投下労働」に、また「他人の労働」を「支配労働」に置きかえられて、今度は、A・スマイスが価値の実体を把握しえたのは、彼が投下労働説と支配労働説とを「並列」させたからだと考えられ、かつ、この点を大いに力説されるにいたつたのである。しかし、遺憾ながらA・スマイスは、すでに述べたように、商品価値の実体をなす労働の独自の性質を正當に把握することができなかった(もっとも彼はそれに感づきはしたのだが)のであり、そして価値論におけるスマイスの二重性そのものは、氏のいわれるごとく、「労働価値説の確立の指標」をなすものでは決してないのである。

ところでわれわれは、アダム・スマイスが、社会的総姿態における労働一般こそが質料的富の眞の源泉だと宣言するにさいして、生産の客体的要因をまったく見逃してしまつたことについて一言しておいたが、質料的富の源泉にかんするスマイスのかかる一面的把握は、やがて彼をたんなる社会的富の領域に追いこむことになる。すなわちスマイスは、質料的富の生産のためには生産の主体的要因たる労働だけで十分だと見做したがゆえに、やがて自己の研究対象から使用価値の問題を追放し、それを交換価値の問題のみに局限することとなるのである。この点

は、スミスが商品価値の実体把握を企てるにあたって、問題を、使用価値を創造する労働から交換価値を措定する労働への移行、というふうに提起したことにおいて如実に示されている。だから、つぎのことは明らかである。すなわち、A・スミスは、使用価値を創造する労働と交換価値を措定する労働とをともかくも区別しはしたが、しかし、この両者を統一的に把握することはできなかったということ、これである。現実的労働から基本形態におけるブルジョアの労働への移行、というふうな問題を提出し、しかも前者を自己の研究対象から駆逐したスミスには、商品において表示される労働の二者闘争的性格を洞察すること、商品を使用価値と価値との統一として把握することは総じて不可能なことであった。かくして、スミスにおいては、分業の出現を契機として生産物が商品に転化するものであり、そしてこの商品そのものは、使用価値および価値という二つの要因の統一としてではなく、一面的に交換価値それ自体として纏まれているのである。^(註) 実際、スミスによる価値の実体把握の試みは、い

わば使用価値の犠牲においてなされたのであった。

- 〔註〕 かかる事情は、当然、スミスの「富」概念を特徴的に性格づけることになる。——
- (→) 社会的分業の出現以前……「富」——質料的富（使用価値）
 - (←) 社会的分業の出現以後……「富」——社会的富（交換価値）

つまりアダム・スミスは、富とは本来、質料的富あるいは使用価値にほかならないが、社会的分業の出現を契機として、それは社会的富あるいは交換価値を意味するようになると考えているのである。

しかるに、スミス投下労働説の排除を目指すT・R・マルサスは、スミスのかかる「富」概念を完全に「富」——質料的富（使用価値）に還元する。この点はマルサスが、スミスにおける術語の定義の不正確さを批判しながら、つぎのように主張する場合に、明白となる。いわく、「たとえば富についての彼（すなわちスミス——引用者）の定義は十分に正確でもないし、

また彼はそれをたえず一様に固守してもいない。しかも、彼がこの術語で、人間に必要であり有用であり快適であり、また自然によつて限りなく豊富に供給されることのない物質的生産物を指していることは、うたがえないところであつて、わたくしは、諸国民の富の原因を説明するにさいして社会で極く一般的に解されており、しかも大へん好都合に使用せられるのはまさにこの意味においてであると確信せざるをえない。⁽¹³⁾

かようにマルサスは、分業の出現以後におけるスミスの「富」概念を正當に理解することなく——もつとも右の一文の最初の箇所でマルサスが、スミスは富にかんする自分自身の定義をたえず一様に固守していないと云う場合には、彼マルサスはスミスの「富」概念が分業の出現とともに変化をきたすことに気づいているのだが——、あたかもスミスが富なる概念のもとに、もっぱら「物質的生産物」(material produce)——質料的富だけを表象していたかのように主張し、しかも、この概念を「まさにこの意味において」もちいるのが「大へん好都合」だと「確信」しているのである。マルサスが、スミスの「富」概念を完全に「富」——質料的富(使用価値)に還元していることは明白であらう。

かくてわれわれは、アダム・スミスが、価値を措定する労働の特殊な性質を正當に把握しえなかつたこと、しかも彼にあつては、商品が使用価値と価値との統一としてではなく、一面的に交換価値としてとらえられていたこと、一言にして云えば、スミスが労働の二重性を正しく認識していなかつたことを知るのである。ここに、スミス投下労働説の根本的な欠陥がある。

とはいえ、A・スミスが、社会的分業によつてもたらされる変化に着目し、かつこれを強調することによつて、商品価値の実体を把握しようとしたこと、いいかえれば、彼がともかくも交換価値の措定者を問題にしたことは、彼の科学的功績をなすものとして高く評価されるべきである。そしてスミスがこのように、基本形態におけるブルジョアの労働の独自の性格を問題にしえたのは、彼がリカアドウとは異なつて、ある程度の歴史感覚をも

つていたことにもとづいているといえよう。スミスが、「資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社会」あるいは「商業社会」をば、「文明社会」(civilized society)もしくは「進歩せる社会」(improved society)から明確に区別していることを想起せよ。もとより、スミスにおけるこの歴史感覚そのものは、彼が、封建的生産様式にたいたブルジョア的生産様式の優越点を指摘・論証する——とくに重商主義者への批判の形で——ことを以つて、みずからの基本的任務としていたという事情に由来するものである。

しかしながら、資本主義の発展期におけるブルジョア・イデオログの一人として、スミスもまた、ブルジョア的生産様式を生産の永久的な自然形態だと見做し、この生産様式を絶対化してしまった。なるほど彼は、リカ・アドウとはちがつて、ブルジョア社会を唯一の社会形態だと解することはしなかったが、しかし、いうところの「文明社会」あるいは「進歩せる社会」そのものが歴史的・過渡的な性格をもっているという点は、資本主義の生産力的性格にゆるぎない確信を抱いていた彼にとつては、ついに理解しえないところであつた。

けれども、スミスがこのように、ブルジョア的生産様式を以つて生産のもつとも優れた自然的形態と見做していただくとすれば、彼が商品をば、労働生産物の歴史的に規定された社会的形態として明確に把握しえないであろうこと、別言すれば、彼が商品の価値形態を、商品価値そのものの本性にとつてまったくどうでもよいものとしてとりあつかうであろうことは、おのずから明らかである。かくてA・スミスは、商品生産の基礎上では生産における人と人との社会的諸関係が必然的に商品と商品との、物と物との諸関係として現われざるをえないという点を見逃して、商品と商品との交換を直接に労働と労働との交換に還元し、労働生産物と労働そのものを平気で同一視する。たとえば彼はいつている。——「それ〔財産……引用者〕の所有が即座に且つ直接に彼〔財産相

統人（引用者）にもたらずものは購買力すなわちすべての労働にたいする或る程度の支配である、さらにいいかえれば、そのときその市場に存するすべての労働の生産物にたいする或る程度の支配である。彼の財産は、この力の大きさに、語をかえて云えば他人の労働の量に、さらに同じことであるが、それを以つて購買または支配しうるところの他人の生産物の量に正確に比例して、あるいは大であり、あるいは小である。⁽¹⁴⁾〔力点——引用者〕

ブルジョア社会の永久的存続を信じて疑わないA・スミスは、このように、労働生産物の商品形態の独自な性格を立ち入つて考察しようともせず、まったく無造作に「労働」(labour)と「労働の生産物」(produce of labour)とを等置するのである。ところが、スミスによるこれら兩者の等置こそは、マルクスが指摘したように、「すでに商品の価値の、それに含まれている労働量による規定と、商品の価値の、その商品が購買しうる労働量による規定、すなわち『労働の価値』による商品価値の規定とのあいだの混同への最初の誘引をあたえている」⁽¹⁵⁾のである。そしてこの混同、つまり投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定との混同は、スミスがその歩をすすめて次のように主張する場合には、すでに明瞭な形をとっている。——

「労働の相等しい諸量は、いつ如何なるところにおいても、労働者にとっては相等しい価値をもつと云つていいであらう。彼の健康、力および活動の正常な状態においては、また、彼が有しうべき熟練の平均度を以つてしては、彼はつねに彼の安息、彼の自由および彼の幸福の同じ部分を犠牲に供さなければならぬ。彼が支払う価格は、彼がその報酬として受け取る諸財貨の量いかんにかかわらず、つねに同一でなければならぬ。なるほど、その労働を以つて購買しうる諸財貨の分量は、あるときはより多く、またあるときはより少いであらうが、変化するのは諸財貨の価値であつて、それらを購買する労働の価値ではない。いつ如何なるところにおいても、それを得ることが困難であるもの、またはそれを得るのに多くの労働を要するものが高価であり、それを得ることが容易であるもの、または非常に僅少の労働を以つて得られるものは安価である。

したがって、ただ労働のみはそれ自身の価値において不変であつて、ただそれのみは、あらゆる商品があらゆる時代あらゆる場所において評価され比較されるころの、究極かつ真の標準である。労働がこれらの商品の真実価格 (real price) であつて、貨幣はただ、これらの商品の名目価格 (nominal price) である」⁽¹⁹⁾。「「シツクならびに力点——引用者」

ここでスミスが、投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定とを混同していることは、きわめて明白である。というよりも、スミス価値論における投下労働説と支配労働説との交錯が、右の一文ではまことにあざやかに、いわば模範的に示されている。まず、われわれがゴシックにしておいた部分では、すでに見たように、実際スミスは、商品の価値において表示される労働が人間的労働力一般の支出にほかならないことに感づいてさえるのである。つぎに、われわれが力点を附した部分でも、スミスは商品の価値をはつきりと投下労働量によつて規定している。しかるにスミスは、その他の部分では、商品の価値を支配労働量あるいは「労働の価値」によつて規定せんとしており、したがつてまた、そこでは「労働の価値」の不変的性格を証拠立てるのに懸命である。しかも、一見してすぐ日につくように、これらの部分は文字どおり入り乱れて存在する。つまりスミスは、いま商品の価値を投下労働量によつて規定したかと思うと、すぐそのあとで、「労働の価値」の不変性を強調する、しかるに彼はいまや一転して、ふたたび投下労働量による価値規定を展開する、そして今度はそれを論拠として、またもや商品の価値を支配労働量によつて規定する、といった具合である。A・スミスが、二つのまったく相反する価値規定を無造作に混同するだけでなく、これら両者をたがいに入り乱れさせ、かくしてその価値論において投下労働説と支配労働説とを交錯的に展開していることは、もはや疑う余地がない。

しかし、価値規定におけるスミスのかかる動搖は、彼の価値論のなかへ別の混乱をもちこんでいる。すなわち

スマスは、一商品が支配しうる労働量をば、投下労働量が価値の尺度だという意味での価値尺度（つまり内在的価値尺度）たらしめるばかりでなく、さらにその歩をすすめて、この支配労働量を、貨幣が価値の尺度だという意味での価値尺度（すなわち外在的価値尺度）として採用するのである。しかもスマスは、支配労働量はそれ自身の価値において不変なるがゆえに、もつとも正確な外在的価値尺度として機能しうると考えている。^{〔註〕}

〔註〕 この点をスマス自身に語らせればこうである。——「労働は価値の唯一の一般的尺度であり、また同時に、その唯一の正確な尺度であることは明らかである。いいかえれば、それは、われわれがあらゆる時あらゆる所において種々の商品を比較することができるところの唯一の標準である。世紀から世紀を通じては、種々の商品の真実価値 (real value) が、それらにたいして支払われる銀の量によって評価されえないことは、すでにわれわれの承知しているところである。そしてわれわれは、年々を通じてそれらの真実価値を穀物の量によって評価することもまたできない。しかるに、労働の量を以つてすれば、われわれは世紀から世紀を通じても、また年々を通じても、非常に正確にそれを評価することができるのである。世紀から世紀を通じては、穀物は銀よりもいい尺度である。というのは、世紀から世紀を通じては、穀物の同一量は銀の同一量よりもより正確に労働の同一量を支配するからである。これに反して、年々について云えば、銀は穀物よりもいい尺度である。けだし、その同一量はより正確に労働の同一量を支配するからである。」⁽¹⁷⁾

なおわれわれは、スマスの右の所論をリカアドウがどのように批判するかを、のちにいたって吟味するであろう。

ともあれ、われわれはここで暫らくのあいだ、スマス支配労働説そのものの意味内容を、いいかえれば、スマスが商品価値を支配労働量によって規定する場合には彼はいったいどのような見地に立っているのかという問題を考察しておくことにしよう。

ところで、いうまでもなく、これまでのところではスマスはまだ、「資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開

の社会」を想定しているのであるが、かかる社会では、生産者たちは相互にただ商品所有者としてのみ対応し、彼らがその生産物をもに分つべき資本家も地主も存することなく、生産された全生産物をもつばら生産者自身に帰属する。したがって、このような社会では、商品に投ぜられた労働量と、その商品が支配しうる労働量とはまったく一致する。だからまた、ここでは支配労働量が、投下労働量と相並んで、商品価値の内在的尺度たりうるかのよう思われる。A・スミス——価値形態を無視し、「労働」と「労働の生産物」とをたえず等置するA・スミスは、事実、そのように考えて、投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定とをとも正しいものと見做したのであった。すなわち彼は、「初期未開の社会」では支配労働量と投下労働量とが完全に一致するのだから、商品の価値の大きいさを前者によって規定しようと、またそれを後者によって規定しようと、なんら択ぶところはないと考えて、支配労働量をば投下労働量とともに価値の内在的尺度たらしめたのである。

けれども、スミスの想定する社会においてすら、支配労働量あるいは「労働の価値」はたんに投下労働量の指数たりうるにとどまるのであって、これを内在的価値尺度と解することは、それ自身において誤謬であろう。ひとも知るように、「労働の価値」（科学的には労働力の価値といわねばならない）は、他の諸商品の価値から特にとりたてて区別されうるものではなく、それは、他のすべての商品と同様に、その生産および再生産に必要な労働の量によって規定されるものである。したがってスミスが、「ただ労働のみはそれ自身の価値において不変であって、ただそのみは、あらゆる商品があらゆる時代あらゆる場所において評価され比較されるところの、究極かつ真の標準である」と断じて、支配労働量あるいは「労働の価値」を以って価値の内在的尺度たらしめんとする場合には、彼は、商品の価値を商品（労働力）の価値によって規定しようと試みているわけである。換言す

ればこの場合には、彼は、価値を説明するにさいして価値そのものを前提するという論理矛盾に陥っているのである。だからこういえよう。——スミスが支配労働説を論述するときには、彼は、一定の社会関係を表示するものとしての商品をではなく、もつとも現象的な意味における交換価値、すなわち何らの形態規定をもたない生産物そのものの量的比率を問題にしているのだ、と。

さてわれわれは、本節での検討をつうじて明らかになつた諸点を要約しておこう。——(一) スミスは、商品の価値を投下労働量によつて規定するばかりでなく、社会的分業がひきおこす変化に目を向けて、商品価値の实体を把握しようと試みた。(二) しかし、この試みは事の性質上、失敗に終らざるをえなかつたし、したがつてまた、スミスにあつては商品価値の实体は不明瞭のままである。(三) スミスは、商品で表示される労働の二重的性格を洞察することができず、商品を使用価値および価値の統一としてではなく、一面的に交換価値としてとらえていた。(四) とはいえ、スミスがともかくも商品価値の实体を問題にしたことは、あくまでも彼の功績をなすものである。(五) しかしスミスは、ブルジョアの生産様式を生産のもつとも優れた自然的形態だと見做していたため、価値形態を商品価値の必然的な現象形態として把握することができず、それを完全に無視してしまつた。(六) スミス投下労働説のこの根本的欠陥はやがて彼をして、投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定とを混同せしめるにいたつた。(七) スミスが支配労働説を論述する場合には、彼は、範疇的な意味での商品をではなく、まさに生産物一般をとりあつていと云える。——以上が、本節での考察によつて明らかになつた主要な諸点である。

約言すればわれわれは、アダム・スミスが一方では、その科学的な把握様式のもとに投下労働説を展開し、他

方では、その皮相的な把握様式のもとに支配労働説を記述したこと、しかもスミスは、この二つのまったく相反する価値論を交錯的に展開して平然としていたことを知りえたわけである。実際、スミスにあっては、投下労働説と支配労働説との交錯が彼の価値論の基本的特徴をなしているのである。マルサスが、価値論におけるスミスのこの二重性にすっかり当惑してしまつて、これをつぎのように慨歎したのも無理はない。いわく、「彼〔スミス——引用者〕は一商品の支配する労働をその価値の尺度として採用するさいに、これにたいするもつとも決定的な諸理由を挙げてはいないし、また、一商品の支配する労働を指しているのか、それともその商品に投ぜられた労働を指しているのかを、いつも明瞭にしていなように思われる。」⁽¹⁵⁾と。

(1) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1812, I. Bk. VI. Ch., p. 51.

大内兵衛訳、第一分冊、一〇〇ページ。

(2) A. Smith, *ibid.*, I. Bk. V. Ch., p. 38. 上掲書、第一分冊、六七ページ。

(3) 越村信三郎・『アダム・スミス』二二—二四ページ参照。

(4) Vgl. K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, herausg. v. K. Kautzky, 1923, I. Bd., S. 135. 向坂逸郎訳、黄土社版、第一巻、一三七—三〇〇ページ参照。

(5) 大内兵衛・『国富論』(訳註) 第一分冊、五四—五七ページ。

(6) K. Marx, *Zur Kritik*, S. 47. 宇高訳、八一—八二ページ。

(7) K. Marx, *ibid.*, S. 48. 上掲書、八二—八三ページ。

(8) A. Smith, *Wealth of Nations*, p. 17. 大内訳、第一分冊、一五—一六ページ。

(9) A. Smith, *ibid.*, I. Bk. V. Ch., p. 40. 上掲書、第一分冊、四七—四八ページ。

- (10) K. Marx, Theorien, I. Bd., SS. 134-135. 向坂訳「一三七ページ」。
- (11) 藤塚知義、『アダム・スミス革命』三二ページ。
- (12) 藤塚知義・上掲書、五五ページ。
- (13) T. R. Malthus, Definitions in Political Economy, 1827, p. 11. 玉野井芳郎訳「一六一―一七二ページ」。
- (14) A. Smith, Wealth of Nations, I. Bk. V. Ch., pp. 38-39. 大内訳「第一分冊、六九―七〇ページ」。
- (15) K. Marx, Theorien, I. Bd., S. 135. 向坂訳「一三七ページ」。
- (16) A. Smith, Wealth of Nations, I. Bk. V. Ch., p. 40. 大内訳「第一分冊、七二―七三ページ」。
- (17) A. Smith, *ibid.*, I. Bk. V. Ch., p. 43. 上掲書「第一分冊、七九―八〇ページ」。
- (18) T. R. Malthus, Definitions, p. 11. 玉野井訳「一七二ページ」。

二 価値論および分配論におけるA・スミスの二重性

(一) 分解価値説と構成価値説との交錯

すでに見たように、スミスは、その価値論において投下労働説と支配労働説とを無造作に交錯させたのであるが、彼はさらに、その分配論においても二つのまったく相異なる所説、すなわち分解価値説と構成価値説とを交錯的に展開する。つまりスミスは、一方では、みずから意識することもなしに投下労働説を固持しつつ、その分解価値説を展開すると同時に、他方では、支配労働説の観点から構成価値説を論述するわけである。けれどもわれわれは、まずスミス分解価値説の内容を立ち入って検討することを以って、本節の敘述をはじめることによ

う。「資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社会」が終熄して、資本關係が出現するにいたるとともに、事態にどのような変化が生ずるかを論じてスミスはいう。――

「資本がひとたび特殊な人々の手に蓄積されるや否や、彼らの或るものは、その資本をもちいて勤勉なる人々に原料と生活資料とを供給して仕事をなさしめ、彼らの製作物の売却によって、または、その人々の労働が原料の価値に附加するものによって利潤を得ようとするのは自然であらう。そして、その完成した製品を貨幣、労働、または他の諸財貨と交換する場合には、原料の価格および労働者たちの賃金を支払うに足るもの以上に、この事業の企業家――あえてその冒険にみずからの資本を投ずるところの、この事業の企業家にも、その利潤として何ものかがあたえられねばならない。それゆえ、この場合には、労働者たちが原料に附加する価値は二つの部分に分解する。そしてその一部分は彼らの賃金を支払い、他の一部分は、雇傭者が前貸したところの、原料と賃金との全資本にたいする利潤を支払う。」⁽¹⁾

ここでスミスが、「あえてその冒険にみずからの資本を投ずるところの、この事業の企業家にも、その利潤として何ものかがあたえられねばならない」と主張し、あたかも利潤なるものが、企業家によってなされる「冒険」にたいする報酬でもあるかのように云う場合には、もちろん彼は皮相的な見解をともにしているのであるが、しかしこの見解は、右の一章句の他の箇所では実際、彼自身によって否定されている。なぜなら彼は、そこではつぎのように考えているからである。――「資本がひとたび特殊な人々の手に蓄積されるや否や」、「労働者たちが原料に附加する価値」は、いまや賃金および利潤という二つの部分に「分解する」ことになる、と。しかもスミスは、正当にも、利潤が生産手段（彼にあっては、労働手段と原料以外の労働対象とが見逃されて、ひとり原料だけなのであるが）に前貸された資本部分とは何のかかわりもないこと、つまり、利潤は附加価値の分解部分

にほかならないことを、大いに強調してさえているのである。^(註)かくてスマスが、利潤を以って企業家の「冒険」にたいする報酬だとする皮相的な見解を、彼自身によって止揚していることは明らかである。だからまた、彼が「製作物の売却」について語る場合にも、彼はけつして、「売却」という流通過程そのものから利潤が発生すると見做しているのではない。そうではなく、彼はただ、労働者たちが生産過程で「原料」に附加する価値の一部分が彼らに支払われないからこそ、資本家は、「製作物の売却」という流通過程をつうじて、利潤を自己の所得として我がものとすることができる⁽²⁾と云っているにすぎないのである。

〔註〕 この点は、スマスがつぎのごとく主張するときには、一段と明白になる。——「あらゆる工芸と製造業においては、労働者たちの大部分は、彼らの仕事の原料と、その仕事が完成するまでの賃金と生活維持費とを前貸してくれる雇傭者を必要とする。雇傭者は、労働者たちの労働の生産物の、いいかえれば、彼らの労働が原料に投ぜられた結果としてその労働が原料に附加するところの価値の分け前に与かる。そしてこの分け前こそが、雇傭者の利潤なのである。」⁽²⁾

ところでスマスは、フイジオクラートから「平均賃金」(Die durchschnittliche Arbeitslohn)の思想をうけついで、賃金は、労働者が彼およびその家族の生活を標準的な状態において持続するのに十分なだけの生活資料でなければならぬと考えている。⁽³⁾そして、彼が分解価値説を展開する場合には、彼は、この生活資料の価値をも投下労働量によつて規定する。つまりこの場合には、彼は事実上、労働者を労働力なる商品の所有者と見做しているのであり、また、この労働力の価値が他の諸商品の価値と同様、その生産および再生産に必要な労働時間によつて規定されていることを、ともかくも把握しているわけである。したがつてスマスが、資本関係の出現とともに附加価値はいまや賃金と利潤とに分解すると主張する場合には、彼はとりもなおさず、つぎのように、すなわ

ち賃金として労働者に帰属するのは、附加価値のうち必要労働の対象化されている部分にほかならず、これに反して、利潤として資本家に帰属するのは同じ附加価値のうち剰余労働が物質化されている部分だと解しているのである。しかも、すでに見たように、スミスは、利潤が決して「原料」に前貸された資本部分からは発生しえないという点を、力をこめて強調するのである。かくてスミスは、利潤の源泉を意識的に研究することにより、たんに利潤を剰余価値に還元するばかりでなく、この剰余価値を積極的に剰余労働に還元した。換言すれば、彼は剰余価値の本源をば正当にも生産過程において把握した。まことにマルクスのいうごとく、「アダム・スミスは剰余価値の真の本源を認識した」⁽⁴⁾のである。^(註)

〔註〕 フィジオクラートは、スミスに先立って剰余価値の本源を生産過程においてとらえていた。しかし彼らは、使用価値を創造する現実的労働——具体的・有用的労働——に目を奪われていたために、剰余価値を抽象的・人間的労働の結晶つまり附加価値の一部分としてではなく、一面的に剰余生産物として把握するにとどまっていた。したがって彼らは、剰余価値の生産を農業部門のみに限定せざるをえなかったし、また、生産的な部門は農業部門だけだと見做さざるをえなかった。しかもフィジオクラートは、封建的土地所有者を剰余生産物の排他的取得者たらしめることによって、剰余価値にかんする自己の分析に前近代的・封建的な外観をあたえていたのである。

しかるに、いまやA・スミスは、剰余価値を積極的に剰余労働に還元すると同時に、剰余価値の生産を農業部門だけに限定しようとする重農主義的偏見を排斥して、たんに農業においてのみでなく、「あらゆる工芸と製造業」においても剰余価値が生産されることを宣言した。(この宣言が、質料的富の源泉にかんする前記の彼の宣言と関連することはいうまでもない。) しかもなお、スミスは、地代を以って剰余価値の支配的形態だとするフィジオクラートの見解を拒否することによって、彼らの剰余価値分析にまといついていた前近代的な外観をすっかり除去したのであった。マルクスがスミスを評価して、

「アダム・スミスは剰余価値の眞の本源 (Das wahren Ursprung) を認識した」〔力点——引用者〕と云う所以である。

スミスはこのように、資本の蓄積によつてもたらされる変化に着目して、ひとたび生産が資本関係のもとなされるにいたるや否や、労働者たちの労働が生産過程で「原料」に附加する価値は賃金と利潤とに分解すると主張し、かくして賃金および利潤をば、ともに附加価値の分解部分として把握したのであるが、彼はさらに、土地の私有がひきおこす変化を強調しながら、つぎのように論述する。——「土地が私有財産となるや否や、地主は、労働者とその土地で生産し、またはその土地から採取しうる殆んどすべての生産物について一種の分け前を要求する。彼の地代は、土地に使われる労働の生産物からの第一の控除をなす。」⁽⁵⁾ またスミスは、これにひきつづいて、つぎのようにも主張する。——「土地を耕す人は、その収穫のときまで彼自身を維持する生活資料をもつてゐることは非常に稀である。通常、彼の生活維持費は雇傭者、すなわち彼を雇う農業者の資本から彼に前貸されるのであるが、この雇傭者は、土地を耕す人の労働の生産物の分け前に与かる以外には、あるいは、その資本が利潤をともなつて彼に償還される以外には、土地を耕す人を雇うべき何らの興味もたない人物である。この利潤が、土地に使われる労働の生産物からの第二の控除をなす。」⁽⁶⁾

ところで、スミスがかように主張する場合には、彼は、生産物の価値の分配をではなく、生産物そのものの分配を問題にしているかのごとくである。しかし、けつしてそうではなく、彼は、ここでも無意識のうちに投下労働説を固守しながら、どこまでも生産物の価値をとりあつかつていたのである。このことは、そこでスミスが附加価値への「分け前」こそが利潤だと云つたところの先の一文が、右の諸章句のすぐあとに位置していることから、明らかなるところであろう。それゆゑに、右の諸章句でスミスが展開しているのは、資本の蓄積と土地の私

有が出現するとともに、労働者は彼の労働が「原料」に附加した価値の全部をうけとることができなくなり、いまやその一部分を資本家が利潤として、また他の一部分を土地所有者が地代として取得することになる、という点にはかならない。^(註)換言すれば、スミスはここで、利潤および地代はともに附加価値からの「控除」であり、それにたいする「分け前」だと主張しているのである。これを以って、A・スミスは、地代をも剰余価値の一部分に還元し、利潤および地代がともに附加価値の不払部分——つまり剰余価値——の一分岐にはかならないことを洞察した。マルクスは、スミスのこの功績を評価して次のように述べている。——「アダム・スミスは剰余価値をば、すなわち遂行されて商品中に対象化されている労働うち、支払労働——自己の等価を賃金で受けとつた労働——を超え、超過分たる剰余労働をば、本来的な利潤や地代はその枝条にすぎないところの、一般的範疇として理解する。」⁽⁷⁾「力点——マルクス」

〔註〕 この場合スミスが、地主は附加価値への「分け前」を労働者自身から要求するものとしていたことは非常に特徴的であり、この点は、内田義彦氏が指摘されているように、「リカアドオとの根本的な相違」⁽⁸⁾をなしている。

スミスがこのように、地主と労働者とを直接的に対立させたのは、彼が産業革命前夜の本来的マニユファクチュア期における古典経済学者であったことにもとづいているが、彼がさらに、「自己の所有地の一部分を経営する大地主は、耕作の費用を支払ったのちに、地主の地代と農業者の利潤との両者を得るであらう」⁽⁹⁾として、地代と利潤との結合、あるいはこれら両者の未分離を強調する場合もまたそうである。この点にかんしてはマルクスのつぎの叙述がある。——「A・スミスは、当時（これは現時でも、熱帯および亜熱帯国における植栽地経営については妥当なことであるが）、土地所有者が同時に資本家でもある——あたかも、たとえばカトーがその領地においてそうであったごとく——ために、地代と利潤とがまだ分離していないことを強調している。だが、この分離こそは、資本制生産様式の前提である。」⁽¹⁰⁾

これらのことからして、われわれは、スミスがその歴史的制約のために、生産諸要因の厳密な意味での資本制的形態を前提しえなかったこと、したがってまた、彼のいう「文明社会」あるいは「進歩せる社会」なるものが、必ずしも完全な意味における資本制社会ではないことを知るのである。なお、リカアドウにあつては事情が大いに異なっているが、この点については、われわれはこれを次章で問題にするであらう。

かくしてスミスは、賃金、利潤および地代をはいずれも附加価値の分解部分として把握し、賃金が労働力の価値の転化せる形態にほかならないこと、そして利潤および地代がともに剰余価値の転化形態にほかならないことを理解した。しかもスミスは、「初期未開の社会」と「文明社会」とを明確に区別しながら、つぎの点、すなわち「初期未開の社会」では労働者は、その労働の生産物を全部享受しえたのに反し、すでに資本関係が出現している「文明社会」では、労働者は、その労働が「原料」に附加する価値のすべてを取得することができなくなるという点を力説したのであり、そしてまさにそうすることによって彼スミスは、「剰余価値の眞の本源」を明らかにしたのであつた。これはもちろん、スミスの偉大な功績であり、また、彼をしてリカアドウよりも優越させている点の一つである。

しかしながら、アダム・スミスは、明白な意識を以つて労働者を「労働力」商品の所有者として把握することができなかつたし、だからまた、剰余価値を固有の範疇として定立することもできなかつた。彼にあつては、ただ賃金、利潤および地代という所得諸概念があるのみである。つまりスミスは、古典経済学者の一人として、エングルスのいう「商業的および産業的生活の諸用語」をそのまま受けとつていたのである。ところが、賃金・利潤・地代なる諸所得は、附加価値が一定の歴史的に規定された生産諸要因——賃労働・資本・近代的地所有——

に媒介されて諸階級に帰属するものにはかならず、生産要因による媒介というこの点においては賃金も、利潤や地代と何ら異なるところがない。したがって、これらの所得諸概念だけにとらわれている場合には、賃金は附加価値の支払部分であるのに反して、利潤と地代とはその不払部分だという点が必然的に曖昧になってくる。事実、「労働力」および「剰余価値」という科学的諸範疇を確立しえなかつたスマイスにおいては、まさにそうである。すなわち彼は、賃金・利潤・地代が何れも附加価値の分解部分あるいはそれにたいする「分け前」であり、その意味ではこれらの所得は少しも拵ぶところがないという点を前面に押し出すことによつて、附加価値の支払部分たる賃金と、その不払部分たる利潤および地代との本質的差異を不明瞭ならしめているのである。ここに、スマイス分解価値説の主要な限界がある。

しかし、スマイスがこのように、ただ日常的な諸概念だけにとらわれて、科学的な諸範疇を定立することができなかったのだとすれば、彼スマイスが、資本と賃労働との交換の問題を価値法則にもとづいて解決することができないであろうこともまた明らかである。なぜというに、もしひとが、資本をば労働力ではなく、生きた労働に對立させる場合には、資本と賃労働との交換においては価値法則そのものが止揚されるかのごとく思われるからである。そこで、資本を生きた労働に直接對立させたA・スマイスは、資本と賃労働との交換の問題を正しく解決することができず、却つて、投下労働量による価値規定は資本関係の出現とともにその妥当性を止揚するのだと考へて、「文明社会」に資本制社会ではこの価値規定は妥当しないと宣言するのである。マルクスは、この宣言を皮肉りながら、つぎのように述べている。——「アダムはもちろん、商品の価値をそれにくまれている労働時間によつて規定するが、そのあとで、ふたたびかかる価値規定の現実性をアダム以前の時代にまで後退させてし

まう。換言すれば、簡単な商品の立場から見れば、彼に真実だと思われるところのものが、簡単な商品の代りに、資本、賃労働、地代、等々といった、より高級な、より複雑な諸形態が現われてくるや否や、彼には不明瞭になるのである。」⁽¹¹⁾

ところで、右の宣言をスミス自身の口から聞けばこうである。いわく、「事態がかよようになる」と「すなわち、資本関係が出現すると——引用者」、労働の全生産物は必ずしも労働者に帰属するとは限らないことになる、労働者は多くの場合、彼を備うところの資本の所有者とそれを分割しなければならない。また、こうなれば、ある商品の獲得あるいは生産に普通に要する労働の量は、通常その商品が購買し、支配し、またはそれと交換されるところの労働の量を規制しうる唯一の事情だと云うこともできなくなる。」⁽¹²⁾

ここでのスミスの論理はつぎのごとくである。——ひとたび生産が資本関係のもとでおこなわれるようになる、労働者はその労働の全生産物を享受することができなくなり、投下労働量と支配労働量とはもはや一致しなくなる、したがって投下労働量による価値規定は資本制社会の到来とともにその妥当性を止揚する。つまり、スミスには、投下労働量による価値規定の妥当性は、価値が諸所得に「分割」されることによつては何らの影響も蒙らないという点が理解できないわけである。

とはいへ、アダム・スミスが、資本関係の出現によつてもたらされる変化をかくも高調し、資本と賃労働との交換の問題を提起したことは、彼の功績をなすものとして正当に評価されるべきである。というのは、スミスはこの場合には、資本と賃労働との交換においては、これを賃労働者の立場から見れば、より少い労働にたいしてより多くの労働が交換されるという点に、すくなくとも感づいているのだからである。

さて、右に見たように、スミスは、「労働力」範疇を定立しなかつたがゆえに資本と賃労働との交換の問題を正しく解決することができず、その結果、資本制社会での投下労働説の妥当性を否定するにいたつたのであるが、他方において彼は、みずからの他の価値論すなわち支配労働説は資本関係の出現以降もひきつづいて妥当しうるものだと主張する。けれども、スミスがかように主張するのはむしろ当然だと云うべきであらう。なぜなら、すでに見ておいたように、スミスがその支配労働説を論述する場合には、なんらの歴史的・社会的規定性をもたない生産物一般を、いいかえれば、あらゆる社会形態に共通な生産一般を問題にしているのであり、したがって、支配労働量による価値規定が歴史上のあらゆる社会——だからまた「文明社会」にも——妥当することは、まったく自明のことだからである。

しかし、念のためにスミス自身の語るところを聞けば、つぎのごとくである。——「価値の各種の構成諸部分の真実価値は、これらの構成諸部分あるいはその各々が購買もしくは支配しうる労働の量によって測定せられるものだということは、ここに注意しておかねばならない。すなわち、労働は、それ自身労働に分解するところの価格部分の価値を測定するばかりでなく、地代に分解する価格部分、および利潤に分解する価格部分をも度量するものである。」⁽¹³⁾ スミスはこのように、支配労働量による価値規定だけは資本制社会においてもその妥当性を止揚しない点を、わざわざわれわれに「注意」するのである。^(注)

〔註〕 しかるにリカアドウは、後述のごとく、スミスによってなされたこの「注意」を完全に無視してしまつて、資本制社会での投下労働説の妥当性を論証することに非常な精力をそそいだのであつた。これに反して、スミスのこの「注意」をどこまでも忠実に守ろうと欲するマルサスは、リカアドウのかかる態度に批判を加えると同時に、皮相的観点に立つスミス

を擁護しながら、つぎのように主張する。――

「リカアドウ氏は、諸商品に投ぜられた労働を、『いくたの事情のもとにおける或る不変の標準として』えらぶとともに、それが通常購買する労働をば、それと比較せられる諸商品の数と同じだけ変動を蒙るものとして退けたが、そのさい氏が、一商品が通常支配する労働には、氏自身の命題に加えて、この命題がはじめて正確な命題となりうるものが含蓄せられていふということ、および、一商品が通常支配する労働を価値の尺度と考えて正しいのは、まさにその労働が、現実に投ぜられた労働に利潤を加えたものを測定するからであるということをもとめていないのは、たしかに極めて注目すべき事実であつた。してみると、一商品の通常価値がその供給の自然にして必要な諸条件によつて決定されると考えられるならば、その商品が通常支配する労働だけが、こうした諸条件の尺度であることはたしかである。⁽¹⁴⁾」

ところが、スミスが商品の価値を、その商品が支配しうる労働量によつて規定する場合には、彼はとりもなおさず、商品の価値を「労働の価値」あるいは賃金によつて規定しているのである。なぜなら、賃金なるものは、一定量の生きた労働が支配しうる商品量に等しく、またこれを逆に云えば、一定量の商品が支配しうる生きた労働量に等しいからである。したがつて、支配労働説とは実は賃金による価値規定だと云つて差支えない。そしてスミスがこのように、商品の価値を賃金によつて規定するさいには、彼はその悩裡に、あらゆる労働はその本性上、自然的に賃労働だという表象を描いているのである。つまりこの場合には、スミスは、なんらの歴史的・社会的規定性をもたない労働一般を、あるいはマルクスの表現を借りれば「たんなる幽霊のような」⁽¹⁵⁾労働を、念頭に置いているわけである。

しかし、こうしてあらゆる労働が本来的に賃労働だと表象したA・スミスは、まさにかく表象することによつて、同時に、歴史的・社会的に規定された生産諸要因たる資本および近代的土地所有からもそのいっさいの形態

規定を剥ぎとつて、これらをたんなる生産手段および土地そのものに還元しているのである。いいかえれば、ミスはこの場合には、生産諸要因の自然的形態たる生産手段および土地がそれらの本性上、つねに資本であり、またブルジョアの土地所有であると見做しているのである。——労働∥賃労働、生産手段∥資本、土地∥ブルジョアの土地所有。あるいは、賃労働∥労働、資本∥生産手段、ブルジョアの土地所有∥土地。かくして、一定の歴史的・社会的規定性を有する生産諸要因が、生産過程一般の質料的諸要素たる労働・生産手段・土地そのものと同一視されることになる。ここからして、俗流的な見解——労働、生産手段および土地が生産過程一般で演ずる役割から賃金・利潤・地代が発生し、これらの所得が交換価値を構成するという俗流的な見解が生れてくる。ミスは、この俗流的見解をつぎのように定式化した。いわく、「賃金、利潤および地代は、すべての交換価値の三つの本源であると同時に、すべての収入の三つの本源である」と。⁽¹⁶⁾

もつとも、ここでミスが、賃金、利潤および地代は「すべての収入の三つの本源」(three original sources of all revenue)だと云うのは正当である。ただし、この場合には、ミスはこれらの所得を附加価値の分解部分として把握しているからである。しかしミスが、賃金、利潤および地代は「すべての交換価値の三つの本源」(three original sources of all exchangeable value)だと語る場合には、彼はまさにそのことよつて右の俗流的見解を定式化しているのである。別言すればこの場合には、彼は、自然的形態における生産諸要因をば諸所得の実体すなわち価値そのものの源泉だと見做しながら、その皮相的な分配論たる構成価値説を展開しているわけである。

ミスは、かように賃金、利潤および地代を交換価値の構成者あるいは構成部分として把握したのちに、「而して最後に、価格のこれらの構成部分の或るものまたは全部を、ときとしてはそれらの自然率あるいは普通率を以

上に高め、またときとしてはそれ以下に低める事情は何であるか⁽¹⁷⁾というふうの問題を提起して、自然価格および市場価格にかんするみずからの所論を展開する。だが、これはスミス構成価値説のいわば延長である。あるいは、もつと正確にいうならば、スミスが展開する自然価格論および市場価格論は彼の構成価値説それ自体なのである。マルクスは、この点を指摘して次のごとく述べている。——「競争においては価値ではなく、生産価格が市場価格の統制者として、いわば内在的価格として——商品の価値として現われる。この生産価格そのものは、しかしまた賃金、利潤および地代の所与の率によって与えられたものとして現われる。したがって、スミスはこれらのものを自立的に、すなわち商品の価値とは独立に、却って自然価格の要素として確立しようとする。」⁽¹⁸⁾スミスがその自然価格論および市場価格論を説述する場合、彼が競争の仮象にまったく目を奪われて、商品の価値あるいは価格は賃金、利潤および地代によって構成され、そしてこれらの所得の大きさそのものは商品価格の高低によつて決定されるといつた論理矛盾——悪循環に陥っていることは明らかである。

かくてわれわれは、いまやつぎのようことができる。——(一) スミスは近代的所有の三つの基本形態たる賃金・利潤・地代を附加価値の分解部分として把握した、(二) のみならず、彼は、資本関係の出現とともにこの変化に目を向けて、剰余価値を積極的に剰余労働に還元し、かつこれを一般的範疇として理解した、(三) けれどもスミスは、日常的な諸概念を無批判的に採用することによつて、労働力の価値の転化形態たる賃金と、剰余価値の転化形態たる利潤および地代との本質的差異を不明瞭ならしめた、(四) しかも、スミス分解価値説の主要な缺陷をなすところの、「労働力」範疇の不定立が、やがて彼をして資本制社会での価値法則の妥当性を否定せしめることになった、(五) けれども、スミスがともかくも資本と賃労働との交換を問題にしたことは、あくまで

も彼の学間的功績をなすものであり、歴史的な観点をもつ彼の強みである、⁽⁴⁾だが、資本制社会でも支配労働者だけはその妥当性を止揚しないとしたA・スミスは、賃金・利潤・地代をば交換価値あるいは自然価格の構成者だと見做して、その構成価値説を展開した、と。要するにわれわれは、スミスが一方では、その科学的な把握様式のもとに分解価値説を展開するとともに、他方においては、その皮相的把握様式のもとに構成価値説を記述したことを知ったわけである。

しかしながら、アダム・スミスは、たんに分解価値説と構成価値説との双方を展開したばかりではなかった。そうではなく、彼は、この二つのまつたく相異なる分配論を何のためらいもなく、文字どおり交錯的に展開するのである。このことは、彼が、個々の商品の価値は賃金、利潤および地代に分解するがゆえに社会の商品総体の価値もこれらの所得に分解せざるをえないと述べたその、すぐあとで、「賃金、利潤および地代は、すべての交換価値の三つの本源であると同時に、すべての収入の三つの本源である」と主張していること、そしてすでに一言したように、この主張そのもののうちに二つの相反する見解が——まったく「同時に」！——ふくまれていることからも、十分にうかがい知ることができるであらう。実際、マルクスのいうごとく、「A・スミスは、ときには賃金と剰余価値（または賃金と利潤）をば、商品の価値あるいは価格を構成する諸部分として説明し、ときには、しかもしばしばその舌の根も乾かないうちに、商品の価格が『分解』してゆく諸部分として説明する」⁽¹⁹⁾（「力点——引用者」）のである。だからこういえよう。——アダム・スミスは、自己の分配論において分解価値説と構成価値説とを相互にわかちがたいまでに交錯させている、と。^(注)われわれが、スミスにあっては価値論および分配論における二重性が特徴的だと云った所以である。

〔註〕否、そればかりではない。スミス分配論においては、科学的な分配論たる分解価値説が、皮相的・俗流的な分配論たる構成価値説によつて、いわば圧倒されているのである。『資本蓄積論』の著者、ローザ・ルクセンブルグが、スミスをV+mのドグマに追いこんだ諸事情を考察するにさいして次のように註記したのも、けだし当然であろう。——「スミスにおいては、商品の価格がV+mに帰せずして、商品の価値がV+mによつて構成されるとなす逆の見解が介入しているという点⁽²⁰⁾は、⁽²⁰⁾そこでは見逃しておく。スミスの価値論〔分配論〕と云うべきであらう——引用者〕にとつては、実にこの穿き違ひの方が、彼のV+mなる公式が現にわれわれの興味をそそっている関係におけるよりも、はるかに重要なのである。」

- (1) A. Smith, Wealth of Nations, I Bk. VI. Ch, p. 52. 大内訳、第二分冊、一〇一—一〇二ページ。
- (2) A. Smith, *ibid.*, I Bk. VIII. Ch, p. 65. 上掲書、第一分冊、一三二ページ。
- (3) Cf. A. Smith, *ibid.*, I Bk. VI. Ch, p. 52. 上掲書、第一分冊、一三七—一三八ページ参照。
- (4) K. Marx, Theorien, I. Bd, S. 141. 向坂訳、一四二—一四三ページ。
- (5) A. Smith, Wealth of Nations, I Bk. VIII. Ch, p. 65. 大内訳、第一分冊、一三二—一三三ページ。
- (6) A. Smith, *ibid.*, I Bk. VIII. Ch, p. 65. 上掲書、第一分冊、一三二—一三三ページ。
- (7) K. Marx, Theorien, I. Bd, S. 144. 向坂訳、一四五—一四六ページ。
- (8) 内田義彦、『ヘギリス重商主義の解体と古典学派の成立』(上)、六〇—六二ページ。
- (9) A. Smith, Wealth of Nations, I Bk. VI. Ch, p. 56. 大内訳、第一分冊、一〇一—一〇二ページ。
- (10) K. Marx, Das Kapital, III. Bd. II. Teil, S. 320, Anm. 44. 長谷部訳、第十一分冊、三四〇—三四一ページ。
- (11) K. Marx, Zur Kritik, S. 47. 半高訳、ハーネマン。
- (12) A. Smith, Wealth of Nations, I Bk. VI. Ch, p. 53. 大内訳、第一分冊、一〇四—一〇五ページ。
- (13) A. Smith, *ibid.*, I Bk. VI. Ch, p. 53. 上掲書、第一分冊、一〇五—一〇六ページ。

- (14) T. R. Malthus, Definitions, pp. 213-214. 王野井訳、一五八ページ。
- (15) K. Marx, Das Kapital, III. Bd. II. Teil, S. 350. 長谷部訳、第十一分冊、三九六ページ。
- (16) A. Smith, Wealth of Nations, I. Bk. VI. Ch., p. 55. 大内訳、第一分冊、一〇九ページ。
- (17) A. Smith, *ibid.*, I. Bk. IV. Ch., p. 37. 上掲書、第一分冊、三七ページ。
- (18) K. Marx, Theorien, II. Bd. I. Teil, SS. 96-97. 大森訳、九二ページ。
- (19) K. Marx, Das Kapital, II. Bd., S. 357. 長谷部訳、第七分冊、六四二ページ。
- (20) R. Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals, SS. 41-42. 益田・高山共訳、五七二ページ。

二 価値論および分配論におけるA・スミスの二重性

〔三〕 A・スミスと「三位一体的範式」

これまでに見たように、スミスは、投下労働量による価値規定を——意識的にはなかったが——保持しつつ、それにもとづいて賃金、利潤および地代をとにも附加価値の分解部分として把握し、みずからの科学的分配論——分解価値説を展開した。そして、まさにそうすることによって、スミスはつぎのことを、すなわち賃金・利潤・地代なる諸所得は、附加価値が賃労働・資本・近代的土地所有に媒介されて諸階級に帰属せるものだということを、いいかえれば、分配のブルジョアの形態は生産そのもののブルジョアの形態を前提するということを、明らかにしたのであった。したがって、スミスがその投下労働説と分解価値説とを展開する場合には、彼は事実上、一定

の歴史的に規定された生産を問題にしているのであり、また、この生産において人と人とがとりむすぶ社会的諸関係の分析をつうじて、近代ブルジョア社会の内的構造の把握という古典経済学本来の任務を果しているのである。ここにわれわれは、スミスが投下労働説にもとづいて分解価値説を展開したことの大きな科学的意義をみとめることができるであろう。

しかしながら、スミスの分解価値説は、彼の投下労働説そのものの欠陥によつて大きく限界づけられている。すなわちスミスは、商品で表示される労働の二重性を正しく把握することができなかったがゆえに、労働は抽象的・人間的労働としては労働対象に新価値を附加するが、同時にそれは、具体的・有形的労働としては生産手段の価値を商品生産物に移譲するという事情を正当に理解することができないで、却つて「生産物価値」(Der *Produktenwert*)と「価値生産物」(*Das Wertprodukt*)とを混同しながら、いわゆる $V+m$ のドグマに陥るようになるのである。

スミスがこのドグマに陥っていることは、彼が、「労働者たちが原料に附加する価値」の諸所得への分解を問題にしたさいに、この「原料」そのものの価値については一言も閑説しなかつたことからすでに明らかなどころであるが、彼がつぎのように語る場合には、それが一段と明瞭になる。——「あらゆる社会においては、あらゆる商品の価値は結局のところ、これらの三部分(賃金、利潤および地代——引用者)のうちのどれか一つ、またはその全部に分解せられるものである。そして進歩せる社会では、これらの三つが大部分の商品の価格のうちに、その構成部分として多かれ少かれ入りこんでいるのである」^{(1)(註)} スミスが、このように主張することによつて、 $V+m$ のドグマを完成な形で定式化していることは明白である。

〔註〕 ついでながら云っておけば、この一文は、スミスが如何に甚だしく分解価値説と構成価値説とを交錯させるかを如実に示すものである。なぜというに、スミスはこの同じ一文のなかで、その前半においては分解価値説を、またその後半では構成価値説を展開しているからである。

もつともスミスは、この $V+m$ のドグマをば他の箇所においては自分自身によつて止揚するのであつて、事実、彼はつぎのように云っている。——「あるいは、農業者の資本を償却するために、または彼の家畜その他の農業上の用具の磨損を補償するために、第四の部分が必要ではないかと考える人があるかも知れない。しかし、農業上のいっさいの用具の価格は、たとえば耕馬にしても、その価格はそれ自身おなじ三部分、すなわちその馬が飼育された土地の地代、それを保護・育成するための労働、および、この土地の地代とこの労働の賃金との両者を前貸するところの農業者の利潤から成るものと考えねばならない。」⁽²⁾

このようにスミスは、われわれの注意を一つの生産部門から他の生産部門へと向けさせることによつて、社会的総資本の場合には、その商品生産物の価値が結局において賃金、利潤および地代に分解せざるをえないと論ずるのであるが、しかし、このさい彼が、個別的資本にかんしては $V+m$ のドグマを自分自身で否定していることは明らかである。というのは、ここでスミスは、「農業者」の生産物の価値が賃金、利潤および地代に分解するばかりでなく、「彼の家畜その他の農業上の用具の磨損を補償する」「第四の部分」、つまり C 部分にも分解することをみとめているからである。かようにスミスが、みずからの $V+m$ のドグマを自分自身で止揚していることは、彼の科学的本能の強さを物語るものにはかならず、これは何といつても彼の功績と見做すべき点である。

けれどもスミスは、商品価値における C 部分の存在を、明白な意識を以つてではなく、ただ科学的本能にもと

づいて認めたにすぎなかった。労働の二重性を洞察しえなかった彼においては、その支配的な見解をなすものは、当然のことながら、どこまでもかの根本的に誤まれるドグマ、すなわち商品の価値は「結局のところ」賃金、利潤および地代に分解するというドグマでしかありえなかった。だからまたスミスは、「価値生産物」あるいは附加価値の賃金・利潤・地代への分解の問題だけに局限せられて、「生産物価値」の資本と諸所得への分解という極めて重要な問題にその解決をあたえることができなかった。かくてわれわれは、スミス投下労働説そのものの根本的欠陥が、いかに大きくスミス分解価値説を限界づけているかを知るのである。

ところで、右に見たように、スミスは商品価値におけるC部分の存在を適確に把握しえないでV+mのドグマに陥っていたのだとすれば、彼が、社会的総資本の再生産と流通の問題を正しく解決することができず、したがってまた、科学的な国民所得論を展開しえないであろうこともまた自明である。しかしわれわれは、この点をより立ち入って検討しておくことにしよう。

さきには「生産物価値」と「価値生産物」とを混同して、個々の商品の価値は「結局のところ」賃金、利潤および地代に分解すると主張したA・スミスは、いまや「年々の生産物価値」(Der jährliche Produktenwert)と「年々の価値生産物」(Das jährliche Wertprodukt)とを同一視しながら、つぎのように論述する。――

「すべての特定の商品の価格すなわち交換価値は、おのおの別々にとって見れば、これらの三つの部分〔賃金、利潤および地代——引用者〕のうちどれか一つ、またはそのすべてに分解するのであるから、各国の労働の年々の全生産物を構成しているところのあらゆる商品の価格もまた、全体として見れば、おなじ三つの部分に分解し、その国の種々なる住民のあいだに彼らの労働の賃金、彼らの資本の利潤、および彼らの土地の地代として分配されなければならない。⁽³⁾」

つまりスミスは、個々の商品について云えることが社会の年々の商品総体について妥当しないはずはなく、したがってこの商品総体の価値もまた、賃金、利潤および地代に分解せざるをえないと主張するのである。スミスが、かく主張することによって、みずからのV+mのドグマを社会的総生産物の価値にかんしても定式化していることは疑問の余地がない。

しかるにスミスは、こうして定式化した自己の見解を、または自分自身によって否定するのである。いわく、「ある大國のすべての住民の総収入とは、彼らの土地および労働の年々の生産物の総額をいう。純収入とは、第一に彼らの固定資本を、第二に彼らの流動資本の維持費を差引いてのちに残る自由な収入をいう。いいかえれば、これは、彼らの資本を蠶食することなしに彼らが直接の消費のために保留しておく資財に編入しうるところの収入、すなわち彼らの生活必需品、便益品および娯楽品に使うところの収入である。」⁽⁴⁾

かくてスミスは、「総収入」(Gross revenue)を「純収入」(net revenue)から区別し、事実上前者のもとに「年々の生産物価値」を、また後者のもとに「年々の価値生産物」を理解することによって、社会的総生産物の価値にかんしてもV+mのドグマを自分自身で止揚したのである。スミスがこのように、彼自身の主張において前後撞着しながらも、社会的総資本の再生産と流通の問題を提起したことは彼の大きな功績であり、後述することく、この点でスミスはリカードウよりも遙かに優っている。

しかしスミスは、「年々の生産物価値」と「年々の価値生産物」とを範疇的に区別しはしなかった。否、労働の二重性を理解しない彼にとつては、そうすることは総じて不可能だったのである。かくてスミスは、社会的総生産物の価値構成をささえ明確に把握しえなかつたため、社会的総資本の再生産と流通の問題に正しい解決をあた

えることができず、したがってまた科学的な国民所得論を展開することができなかった。すなわち彼は、社会的総生産物の価値あるいは「年々の生産物価値」はどのように資本と諸所得に分解するかという問題を未解決のままに放置して、みずからの研究を、「年々の価値生産物」の諸所得——賃金、利潤および地代——への分解の問題だけに局限しているのである。いいかえれば、国民所得論の領域におけるスミスの支配的な見解は、各国の年々の商品総体の価値は「その国の種々なる住民のあいだに」賃金、利潤および地代として分配されるという一面的な見解でしかなかったのであって、実際、スミスの国民所得論とは「年々の価値生産物」の諸所得への分配だけをとりあつかうものにすぎなかったのである。だからわれわれは、いまやつぎのようにいうことができよう。

——スミス分解価値説の根本的欠陥たる $V+m$ のドグマは、スミスの国民所得論にたいして非常に大きな限界を附与している、と。

しかもスミスは、資本制生産の規定的モメントが価値一般の生産ではなく、まさに剰余価値の生産にあり、したがってまた、資本制社会において問題なのは「総所得」(Das Roh Einkommen)——賃金+利潤+地代——ではなくて、まさに「純所得」(Das Reineinkommen)——利潤+地代——であるというこの極めて重要な論点をすっかり見逃している。これをスミスがすっかり見逃していることは、彼が、「総収入」なる概念のもとに「年々の生産物価値」を、そして「純収入」なる概念のもとに「年々の価値生産物」を念頭に置きながら、「彼ら〔ある大國のすべての住民——引用者〕の眞の富もまた、彼らの総収入に比例するのではなくて、彼らの純収入に比例する」⁽⁵⁾と主張していることよって明らかである。なぜなら、スミスはこの場合、資本制社会の「眞の富」(real wealth)をなすものとして「純所得」をではなく、「純収入」すなわち賃金+利潤+地代を一樣に強調しているからであ

る。かくてスミスの国民所得論は、「年々の価値生産物」の諸所得への分解という限られた範囲内においてさえ、はなはだ不満足なものでしかないのである。

かくしてわれわれは、スミスの科学的価値論 \parallel 投下労働説の根本的欠陥をなすところの「労働の二重性」把握の不成功が、彼を $V+m$ のドグマに追いこんだ（もつとも彼の科学的本能は、ときとしてこのドグマを止揚したのではあるが）こと、そしてスミスの科学的分配論 \parallel 分解価値説のかかる弱点が、彼の国民所得論に大きな限界をあたえている（もつとも彼は、ときとしてこの限界をも踏みこえたのではあるが）ことを知るのである。

ところでアダム・スミスは、たんに投下労働説と分解価値説とを展開したばかりではなく、同時に、支配労働説および構成価値説をも展開した。だが、すでに見ておいたように、支配労働説の観点に立つスミスが、賃金、利潤および地代を以って交換価値の構成者と解しながら、その構成価値説を展開する場合には、彼のとらえている生産諸要因は、けっして同一の経済的社会構造に属する歴史的諸形態としての生産諸要因ではなくて、たんなる自然的形態における生産諸要因、すなわち労働、生産手段および土地にはかならなかった。したがって、スミスはこの場合には、ブルジョア社会の内部構造の解明という古典経済学本来の任務を忘却ないし放棄して、あらゆる社会形態に共通な生産一般における物と人との、あるいは物と物との関係をとりあつかっているのである。だからまた、スミスが支配労働説にもとづいて構成価値説を展開する場合には、彼は事実上、経済学の対象は一定の歴史的に規定された生産ではなくて、まさしく生産一般にあり、そしてこの生産一般における物と人との、または物と物との関係を明らかにすることが斯学の任務だと宣言しているわけである。^(注)

〔註〕『国富論』第一編のテーマが、「労働の生産力改善の原因と、その生産物が諸階級の人々のあいだに自然的に分配せら

れる順序について」となっている点を想えば容易に察せられるように、スミスは、富の生産および分配を規制する諸法則を究明することを以て経済学の任務だと考えている。(彼が経済学の実践的な目的をば、人民と元首との双方を富ますことにあるとしていることは周知のところである。)しかるに、スミスにおいては、富そのものが、あるときは一定の社会關係を表示するものとして把握され、また別のときには、なんらの形態規定をもたない生産物一般として把握される。だから、スミスにあっては経済学の対象は二重的である。すなわちスミスは、あるときは一定の歴史的に規定された生産をとりあつかい、そして他のときには、あらゆる社会形態に共通な生産一般を対象とするのである。

ところがマルサスは、経済学の対象にかんするスミスのこの二重性を排除して、これを完全に一面化する。つまり彼は、経済学の対象をまったく一面的に生産一般において見出すわけである。このことは、彼マルサスが、経済学の「最高の課題」は「諸国民の富の原因を通常の語義にしたがって最も具体的に説明する」点にあるとして⁽⁶⁾いることからも知りうるところである。というのは、すでに一言したように、マルサスは、いわゆる「富」なる概念のもとに徹頭徹尾、生産物、一般を表象しているからである。

ところでわれわれは、スミスが支配労働説の観点に立つてその構成価値説を論述するときには、彼は、あらゆる生産過程に共通に必要な質料的生産諸要因——生産手段・土地・労働——が生産過程一般で果す役割から利潤、地代および賃金が生ずるものと見做しているという点を、すでに見ておいた。だからわれわれにはつぎのこともまた明らかである。すなわち、A・スミスは、その支配労働説と構成価値説とを展開することによって、そこではすべてのものが二重に置かれているところの、つまりそこでは生産諸要因として資本(実は生産手段それ自体なのだ)、土地および労働が、また分配諸形態として利潤、地代および賃金が配列されているところの「三位一体範式」を定式化したということ、これである。実際、アダム・スミスは、社会的生産過程のもつとも現象

的な表現たる「三位一体的範式」^(註)、すなわち「資本——利潤、土地——地代、労働——賃金」という範式の定式者なのである。別言すればA・スミスは、「三位一体的範式」——そこでは質料的諸関係と社会的諸関係とが直接に癒着しあい、物の人格化と人格の物化とが完成されているところの、したがってまた、そこでは資本制生産様式の神秘化が文字どおり完全に仕上げられているところの「三位一体的範式」をば、みずからの支配労働説と構成価値説とを展開することによって定式化したのである。スミスが支配労働説の見地から構成価値説を記述する場合、彼が、まったく仮象の世界にとらわれて、事態をば、それがブルジョアの生産当事者たちにたいして自己を表示するがままに描いていることは明らかであろう。

〔註〕 いうまでもなく、この範式に見られる「利潤」は企業者利得と利子とをふくむものである。ところが、皮相的な見地に立つものにとっては、企業者利得は資本に係わりのない「賃金」として現象し、利子だけが資本の本来的な所得として現象する。そこでこの範式は、いまやさらに、「資本——利子、土地——地代、労働——賃金」という形態に還元されることになる。だが、それと同時に、物の人格化と人格の物化とが、つまり資本制生産様式の神秘化が、最高度に完成されることになる。というのは、「資本——利潤」なるシェーマにおいては、資本の直接的生産過程の痕跡あるいは思い出がまだ多少とも残っているのに反して、「資本——利子」なるシェーマにあつては、この痕跡あるいは思い出さえも、すっかり消え失せているからである。

さて、以上の検討をつうじて判明したように、スミスは一方では、その科学的な把握様式のもとに投下労働説と分解価値説とを展開し、まさにそうすることによって古典経済学の本来的任務を果たしたが、他方において彼は、その皮相的な把握様式のもとに支配労働説と構成価値説とを論述し、かくして「三位一体的範式」を定式化したのであつた。それゆえわれわれは、価値論および分配論におけるスミスの二重的性格は、彼が古典経済学者であ

つたと同時に俗流経済学者でもあったことを意味するものだと云うことができるであろう。実際、アダム・スミスはいわば二つの世界に、すなわち古典経済学の世界と俗流経済学の世界との双方に所属していたのである。

- (1) A. Smith, *Wealth of Nations*, I Bk. VI. Ch., pp. 53-54. 大内訳、第一分冊、一〇五ページ。
- (2) A. Smith, *ibid.*, I Bk. VI. Ch., p. 54. 上掲書、第一分冊、一〇五—一〇六ページ。
- (3) A. Smith, *ibid.*, I Bk. VI. Ch., p. 55. 上掲書、第一分冊、一〇九ページ。
- (4) A. Smith, *ibid.*, II Bk. II. Ch., p. 227. 上掲書、第二分冊、二五—二六ページ。
- (5) A. Smith, *ibid.*, II Bk. II. Ch., p. 227. 上掲書、第二分冊、二六ページ。
- (6) T. R. Malthus, *Definitions*, p. 10. 玉野井訳、一六ページ。